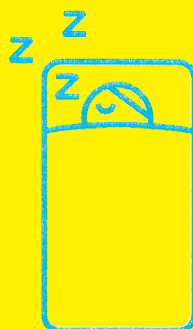
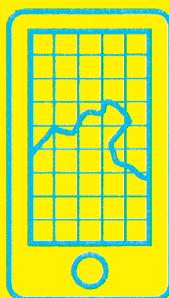
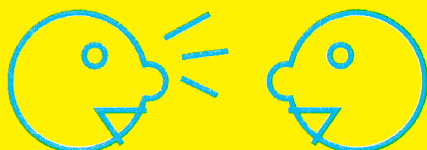
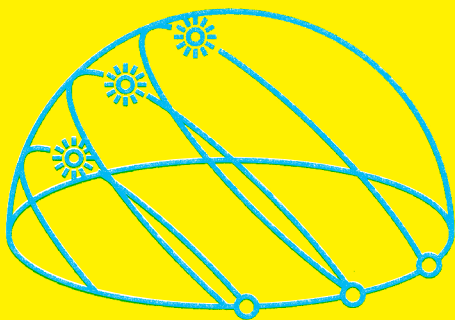
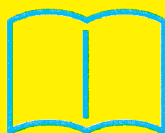


介護福祉士 被災地派遣

ガイドブック



2024年能登半島地震で
私たちが学んだこと



社会福祉法人 福祉楽団

社会福祉法人 愛川舜寿会

社会福祉法人 みねやま福祉会

社会福祉法人 生活クラブ

社会福祉法人 薫英会

社会福祉法人 小田原福祉会

はじめに

社会福祉法人としての責任があります。介護福祉士としての矜持があります。そして、苦しみを分かち合いたいと思う人としての素直な感情があります。こうした心意気が重なり合った6つの社会福祉法人が、「令和6年能登半島地震」で開設された福祉避難所の支援に入ることになりました。

想像以上に大変な仕事でした。

明日来る災害の際に自分も助けてもらいたい、という思いから支援活動を始めただけでしたし、ただじっとしていられなかったというのが活動の正直な動機だったと思います。

先に支援に入っていた福井県の「オレンジホームケアクリニック」や、神奈川県「ぐるんとびー」のチームに加わる形で、私たちFamSKO（ふあむすこ）の活動が始まりました。FamSKOという名前には特に意味はなく、6つの法人の頭文字を並べただけです。しかし、実際の支援活動は熱意に溢れていました。毎日スマホでは熱烈なやり取りが繰り返されており、介護福祉士たちのたくましい姿に感動しました。その熱意と感動を情緒的な言葉だけで終わらせるのはもったいないと思い、ブックレットとしてまとめることにしました。（これもまた大変な仕事でしたが）

自然災害は、明日は我が身です。この経験を一般化しておくことで、これからの人材育成や平時の備えのヒントになるかもしれません。そして、輝いていた介護福祉士たちの姿を記録に残しておきたかったのです。何かの役に立つと信じています。次の活動のヒントになれば幸いです。

福祉支援チームFamSKO

社会福祉法人福祉楽団 理事長 飯田 大輔

社会福祉法人愛川舜寿会 理事長 馬場 拓也

社会福祉法人みねやま福祉会 理事長 櫛田 匠

社会福祉法人生活クラブ 理事長 三好 規

社会福祉法人薫英会 理事長 大林 裕子

社会福祉法人小田原福祉会 理事長 時田 佳代子

目次

01 福祉支援チーム FamSKO 第1次～第8次派遣隊

02 はじめに

第1章 福祉支援チームFamSKO 活動記録

04 6つの社会福祉法人による支援活動

06 FamSKO 主要タイムライン

第2章 介護福祉士のコンピテンシー

10 コンピテンシーとコンピテンシーモデル 調査概要+調査結果のまとめ

12 発災初期から福祉避難所の支援に携わる介護福祉士に求められるコンピテンシー

17 論考 | 介護福祉士の本来の役割と専門性が試される被災地支援

18 コラム | 非日常の「楽しい」に込められた意味

19 コラム | 災害が起こっても暮らしは続いている 暮らしに伴走できる介護福祉チームは最強だ

第3章 バックオフィス側のコンピテンシー

20 現場をささえるバックオフィスのチェックリスト

22 平時に教育訓練しておくべきことチェックリスト

24 発災直後に介護福祉士を派遣するときの持ち物チェックリスト

26 介護福祉士を送り出すときに伝えるべきことチェックリスト

27 福祉避難所で活動開始時にやるべきことチェックリスト

28 意外と知らない? おさえておきたいミニ知識

第4章 FamSKO 座談会

30 福祉支援チーム FamSKO からの提言

37 リアルティのあるBCPをつくろう 座談会を受けて

おわりに それぞれの振り返りから

38 社会福祉法人福祉楽団

39 社会福祉法人愛川舜寿会

40 社会福祉法人みねやま福祉会

41 社会福祉法人生活クラブ

42 社会福祉法人薫英会

43 社会福祉法人小田原福祉会

第1章

福祉支援チームFamSKO活動記録

文：上垣喜寛

6つの社会福祉法人による支援活動

「令和6年能登半島地震」が発生し、6つの社会福祉法人が有志で災害福祉支援チームを結成した。チームは被災地における福祉避難所の運営支援を目的に、介護福祉士や看護師などを派遣。1月11日から石川県輪島市内の福祉避難所に最初の介護福祉士を派遣し、避難者への介護や生活支援を提供する活動を行った。その後、二次避難先となった福井県勝山市の市民交流センターにも並走して支援を続けた。2月21日までの42日間に渡る継続的な支援は、6法人の信頼関係と連携によって成立した。

「海と空（ウミュドゥソラ）」は、石川県輪島市にある社会福祉法人弘和会が運営する小規模施設です。1階には個室5名分と家族支援室、相談室、共用リビングが、2階に個室5名分と共用リビングがあり、2018年に開設されました。障害者のグループホームと、緊急時のショートステイとして幅広い年齢層に使われています。「令和6年能登半島地震」の発災後は、もともといた利用者はほかの拠点に集約され、この場所を福祉避難所とすることになりました。多いときには1日70人の避難者が身を寄せました。

福祉避難所 海と空（ウミュドゥソラ）



F 社会福祉法人 福祉楽団



所在地 千葉県千葉市美浜区中瀬二丁目6番地1
設立年 2001年
職員数 509名
実施事業 特別養護老人ホーム、放課後等デイ、訪問介護、就労継続支援など分野にとらわれず事業を実施

a 社会福祉法人 愛川舜寿会



所在地 神奈川県愛甲郡愛川町角田140-3
設立年 1992年
職員数 174名
実施事業 特別養護老人ホーム、グループホーム、小規模多機能居宅介護支援、放課後等デイ、就労支援、認可保育所などを地域にひらかれた形で実施

m 社会福祉法人 みねやま福祉会



所在地 京都府京丹後市峰山町呉服10番地
設立年 1950年
職員数 636名
実施事業 児童福祉・障害者福祉・高齢者福祉の事業を実施し、地域と連携しながら包括的な福祉支援を行う

S 社会福祉法人 生活クラブ



所在地 千葉県佐倉市山崎529-1
設立年 1998年
職員数 1,786名
実施事業 高齢者、子育て、障がい児者、相談など、人生のすべてのステージで必要とされる支援、応援を行う

K 社会福祉法人 薫英会



所在地 群馬県北群馬郡吉岡町上野田3471
設立年 1977年
職員数 146名
実施事業 障害者支援施設、特別養護老人ホーム、就労継続支援、グループホーム、相談支援などの事業を地域とつながりながら実施

O 社会福祉法人 小田原福祉会



所在地 神奈川県小田原市穴部377
設立年 1977年
職員数 484名
実施事業 特別養護老人ホーム、デイサービス、地域包括ケアシステム構築など、地域と連携した高齢者・障害者支援事業を展開

FamSKO 主要タイムライン 2024年1月1日～2月21日

1月1日 石川県能登地方でマグニチュード7.6の地震が発生。震源地は志賀町で、震度7を記録し、建物の倒壊や主要道路の崩壊、道路の寸断が相次ぐ。特に志賀町や輪島市、珠洲市などで大規模な被害が報告され、輪島市では大規模な火災が発生。写真①

①



石川県輪島市内にて（撮影日1月11日）

1月3日 被害地域での避難所が1,500か所以上開設され、5万人以上が避難。物資の不足や寒さによる生活環境の厳しさが報じられ、「避難者の不安が高まる中、物資の到着が遅れている」と新聞各紙が伝える。写真②

②



輪島市内の避難所（撮影日1月29日）

1月7日 石川県知事が「過度なボランティアの流入は救援活動の妨げになる」として、早期段階でのボランティアの自発的な来訪を控えるようX（エックス）等で呼びかける。事前登録制や自己完結型支援の必要性が強調される。写真③

1月8日 医療法人社団オレンジとNPO法人ぐるんとびーが、現地の社会福祉法人弘和会と輪島市当局と調整して「海と空」に福祉避難所を開設。

1月9日 10:29 オレンジの紅谷代表から福祉楽団の飯田宛に「助けに来て欲しいです」と支援の要請がある。

10:30 「了解です」と返信。

13:41 福祉楽団から愛川舜寿会に協力の要請。

③



石川県庁内の記者会見で「個人的なボランティアに来てもらうのは2次被害に直結するのでお控えいただきたい」と発言する馳浩知事（1月10日／共同通信）

1月10日 派遣準備「現地連絡」のメッセンジャーグループ立ち上がる。第1次派遣隊のメンバーが決まる。

1月11日 03:45 福祉楽団2名が神奈川県愛川町に向け出発。写真④

06:25 愛川町で愛川舜寿会2名と合流し、第1次派遣隊が被災地に向けて出発。

18:10 福祉避難所「海と空」に到着。写真⑤

ライフラインや物資状況の確認を行う。要支援避難者の介護支援を開始。口腔ケア、排泄介助などを開始。写真⑥

避難者数 35名

④



車中の様子

1月13日 災害派遣医療チーム（DMAT）本部の打ち合わせに参加。その他、輪島市内の避難所の視察。介護ニーズの高まりを感じる。

1月14日 東京都水道局により屋外用給水タンクが設置され安定的に飲水可能な水が供給される環境ができる。排水は公共下水道で復旧していないため引き続き使用不可の状態が続く。自衛隊によって要支援者が「海と空」に運ばれてくる。社会福祉法人佛子園「輪島KABULET」の温浴施設で要支援者の入浴支援を開始する。

今回の支援参加法人6法人が固まる。支援チームは各法人の頭文字をとって「FamSKO」とすることで決定。

⑤



到着時の「海と空」の様子

1月14日 岸田首相が被災地入りし、輪島市や珠洲市の避難所などを視察する。緊急の予算措置やライフラインの復旧の方針を伝える。写真⑦⑧

1月15日 ホテルや旅館などの二次避難先への移動が開始。孤立集落の住民も、救助の進展に伴い避難所や二次避難先に移動し始める。

1月16日 第2次派遣隊が出発。写真⑨
段ボールベッドの組み立て開始。ボランティアナースの会「キャンナス」と協力しながら避難者の介護を展開。写真⑩
避難者数 34名

1月18日 5:50 福祉避難所で初めての終末期ケアが行われる。

ご逝去された方は95歳の男性でした。ご夫婦で避難しており、奥様がコロナ陽性で旦那様が同部屋で介護をしていました。

奥様の症状が軽減後に旦那様が発熱みられ始めたと同時に食事・水分量の低下が顕著。ほとんど召し上がられず「お粥なら」と仰り、話の中で好きであるという梅干しも一緒に。お粥は50g程度と梅干しは昔ながらの酸っぱい物を提供。介助で数口召し上がる事ができ、水も100cc程の摂取。

3時過ぎより呼吸苦が見られ始め、口唇・手にチアノーゼも見られる。衣類をゆるめ、窓と入り口を開け換気を行う。サチュレーションは計測出来ませんでした。少し呼吸苦が和らぐ事もあり。医師へ報告し、心不全だろうという事で、本人希望もあり安楽な座位↔側臥位を繰り返す。

本人自身が「延命はやらん。輪島で死ぬんなら本望や。」と昨日はつきりと仰っており、ご家族も「本人は頑固で医療行為はやらない人です。そのままお願いします。」とのことでこのまま看取することに。

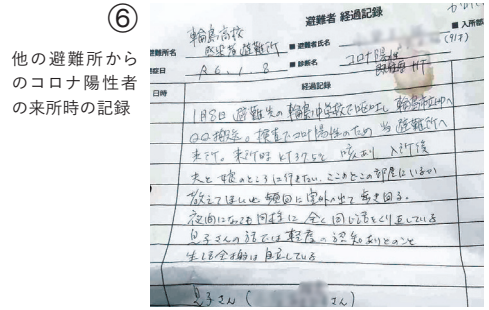
医師と奥様が付き添いのもと、奥様「ゆっくりしてや天国で待っててな。」と声をかけながら息を引き取られる。

終末期ケアを行った職員の活動記録より

福祉避難所にはじめてのゴミ収集車が来る。写真⑪

ボランティア登録者が1万人を超える。

1月20日 福祉楽団から理事長ほか2名で現地の状況調査、輪島市役所等関係機関への挨拶を行う。オレンジのコーディネーターらと協議し、FamSKOの活動期間は概ね2月上旬までとすることをざっくりと確認。
下痢症状のある避難者が増加傾向となる。



岸田首相が訪れた輪島朝市付近（撮影日1月23日）



避難所になっている石川県珠洲市の中学校で、被災者と言葉を交わす岸田首相（右端）（1月14日/共同通信）



往路移動は大雪で視界が遮られる状態になった



第1次派遣隊と第2次派遣隊の引継ぎの様子



山積みになるゴミ（撮影日1月15日）

FamSKO 主要タイムライン

1月21日 第3次派遣隊が出発。
メッセンジャーグループで現地の状況や派遣準備などを簡単にまとめた「派遣職員へのガイダンス」を発信（その後、随時更新）。

避難者がインフルエンザを発症、介護を継続。

避難者数 39名

1月22日 物資の運搬、入浴、排せつ、日常的な介護などを継続。
報道向けにFamSKOの活動をプレスリリース。**画像⑫**

1月23日 石川県が「復興生活再建支援チーム」を発足。「被災された数万人の方々ひとり一人の要望に応え、目標を示しながら創造的復興のため進んでいきたい」（馳知事）

「福祉新聞」一面に「被災は現場で起きている 今こそ秩序ある支援が必要」（社会福祉法人佛子園理事長 雄谷良成氏）と題する論評が掲載され、「福祉関係者の（支援）の中には、（中略）組織的支援の妨げとなる例も少なくない」との意見が発表される。

1月24日 避難者が新型コロナウイルス感染症（コロナ）で陽性、できるだけの隔離をしたうえで継続して介護を提供。

1月26日 FamSKO 6法人によるオンラインの調整会議を初めて実施。
第4次派遣隊が出発。

避難者数 40名

1月27日 一般ボランティアの第1陣の派遣を開始。金沢市の県庁から七尾市や穴水町、志賀町へ75人が出発。羽田・能登空港便の一部の運航が再開。

1月28日 コロナ陽性者が5名となる。

1月29日 オレンジが福井県勝山市に二次的な広域避難所を設置したのでFamSKOの一部を勝山市に派遣して欲しいと要請がある。

1月30日 待望の仮設トイレが2基設置される（発災から30日目にしてやっと）。**写真⑬**

自衛隊の車輛により「海と空」から勝山市の広域避難所に3名を搬送。**写真⑭**

1月31日 第5次派遣隊が出発。
一部を福井県勝山市に派遣することになる。

認知症で行方不明になっていた人の搜索、警察により発見。元寿司職人と稲荷寿司づくりを楽しむ。

避難者数 31名

⑫



2024年1月22日

福祉支援チーム FamSKO

福祉支援チームFamSKOの活動について

福祉支援チームFamSKOでは、「令和6年能登半島地震」における福祉避難所を支援するため、介護福祉士等の福祉専門職の派遣を継続して行っております。

1. 団体の概要
 - 名 称 福祉支援チームFamSKO（ふぁむすこ）
 - 代 表 飯田大輔
 - 副代表 高増拓也
 - 構成団体 有志の6つの社会福祉法人により構成されています。
 - ① 福祉支援（千葉県 - 事務局団体）
 - ② 愛川舞寿会（神奈川県）
 - ③ みねやま福祉会（京都府）
 - ④ 生活クラブ（千葉県）
 - ⑤ 東葉会（群馬県）
 - ⑥ 小田原福祉会（神奈川県）
2. 活動の内容
 - 活動場所 石川県輪島市差夜町6-30-4
地域生活支援「海と空」に開設された福祉避難所
 - 活動期間 2024年1月11日～（2月中旬までを予定）
 - 派遣人員 介護福祉士等を常時4～8名を派遣
 - 支援物資 自動車等の貸し出し、介護発生用品等
3. 活動の様子

原形産産業者の直接支援 福祉避難所の設置
4. お問い合わせ

FamSKOについて（事務局） 担当 飯田（福祉担当） 携帯電話 090-1613-5151 電子メール dasuke@gakudan.org	現場での活動状況について（本日報載） 第3次派遣隊 担当 石間大輔（1月22日から26日まで） 電話 080-2002-7070 電子メール ishima-taro@gakudan.org
--	--

LINE QRコード

⑬



繰り返しの要望でやっと設置された仮設トイレ

⑭



自衛隊による搬送

2月2日 輪島市内の他の福祉避難所の視察、状況把握を行う。写真⑮

2月3日 入浴支援、食事支援などの介護を継続。写真⑯
輪島高校の避難者のうち要支援者は全員「海と空」に移動したことを把握。

輪島市で被災者向けの仮設住宅が完成。18世帯の入居が開始される。この時点での入居申請者は約7,000件にのぼる。(7月30日時点で5,498戸が完成)

2月5日 炊き出しボランティアの受け入れなどを継続。
第6次派遣隊が出発。
避難者数 32名

2月7日 FamSKOの活動期間を2月20日までとすることを決定。
石川県外への二次避難が進んできていることや、派遣元の法人の人材にも限りが出てきているため。

2月8日 FamSKOの活動が共同通信からニュース配信される。

2月10日 第7次派遣隊が出発。
避難者数 31名

2月15日 第8次派遣隊が出発。

石川県は能登半島地震の死者が242人(災害関連死15人)になったと発表。16市町で最大約11万戸に上った断水が7市町で約2万9,520戸に。

避難者数 32名

2月19日 撤収支援要員が出発。
避難者数 32名

2月20日 「海と空」での支援活動を終了。輪島市役所、関係機関に挨拶。写真⑰

2月21日 停電戸数が約1,200戸に。発災時の約4万戸から減少し「概ね復旧」(経済産業省)と発表。

FamSKOの被災地派遣を終了。



⑮ ようやくコンビニが再開し始める



⑯ 節分の豆まきを楽しむ



⑰ 輪島市役所にFamSKO撤収の挨拶

第2章

介護福祉士のコンピテンシー

調査担当：堀田聡子、金山峰之

いざ被災地に介護福祉士を派遣しようとするとき、経営者はどういう人材を選抜しているのか。また、どうい
う介護福祉士が被災地の状況に適応し、活動できるのか。思考や行動の特性（コンピテンシー）を整理してお
くことで、平時の訓練や教育のあり方がみえてきます。2024年能登半島地震の被災地に派遣された介護福祉士
らからインタビューを行い、被災地派遣にどのような「能力」が求められるのかを整理してみたいと思います。

コンピテンシーとコンピテンシーモデル

コンピテンシーは、「ある職務や状況に対して効果的あるいは優れた業績を生み出す根源的な特性」と定義さ
れています。「根源的な特性」に何を含むかについてはさまざまな見解があり、氷山モデルと呼ばれるコンピテ
ンシーの範囲図では、水面上にある（目に見える）知識や技術だけでなく、水面下の（隠された）動因や特性、
態度や価値観を含むものという説明もあります。

コンピテンシーモデルは、**成果をあげることが予測される行動や思考の特性を、行動分析やインタビュー等か
らモデル化したもので、人材育成や処遇等に活用されます。**

調査概要

目的

福祉支援チームFamSKO活動の経験
に基づき、**発災初期**に被災地支援（と
くに**福祉避難所の運営支援**）に携わ
る**介護福祉士**に求められるコンピテ
ンシーモデルを作成すること。

方法

危機管理・災害対策、とくに災害時支援における専門職の活動とコンピテンシーモデルに関する先行
研究の文献調査、FamSKO現地連絡用メッセージンググループのやりとりの検討、FamSKO関係者
（派遣元法人3人、派遣職員1人、福祉避難所の運営者としてFamSKO派遣職員を受け入れた医療
職2人）らとの集中討議を経て、派遣職員へのインタビュー調査*を実施。インタビューデータの逐語
録をもとにコーディング・カテゴリー化、調査チーム3人の分析によりコンピテンシーリスト案を作成、
FamSKO派遣元法人、受け入れ側及び外部専門家によるレビューを経てリストをとりまとめ。

*インタビュー調査の実施概要

FamSKOから2024年1月中に石川県輪島市内の福祉避難所に派遣された以下の介護福祉士12人（5法人に推薦を依頼）を対象として、主な調査内容は、時系列での振り返り、心がけたこと・大事にしたこと（自
身の安全と健康を守る／避難者の支援／多様な関係者との連携等）、身に着
けておいてよかった／身に着けておきたい行動・思考の特性、知識や技術、
Google フォームによる事前アンケート実施のうえ、対面によるグルー
プインタビューを実施（1グループ3人、各3時間×4回、2024年3月）。「仕事ができる」と感じた人、介護の仕事の経験、被災地支援の経験 等

久古浩孝 きゅうこう・ひろたか
社会福祉法人福祉楽団 認知症
デイサービス 管理者 介護福祉
士 1980年生まれ



高瀬雄志 たかせ・ゆうじ
社会福祉法人愛川舜寿会 小規
模多機能型居宅介護 KCCショー
タキ 介護福祉士 1983年生まれ



大林孝明 おおばやし・たかあき
社会福祉法人薫英会 特別養護
老人ホーム 船尾苑 副施設長 介
護福祉士 1972年生まれ



古山弘人 こやま・ひろと
社会福祉法人福祉楽団 特別養
護老人ホーム 社の家なりた 施設
福祉サービス部部长 介護福祉
士 1997年生まれ



田畑二郎 たばた・じろう
社会福祉法人愛川舜寿会 特別
養護老人ホーム ミノワホーム 生
活相談員 介護福祉士 1971
年生まれ



柴崎広哉 しばさき・ひろや
社会福祉法人薫英会 障害者就
業・生活支援センター みずさわ
係長 介護福祉士 1972年生まれ



井上亮介 いのうえ・りょうすけ
社会福祉法人福祉楽団 特別養
護老人ホーム 社の家やしお 統
括コーディネーター 介護福祉士
1988年生まれ



浅井祐介 あさい・ゆうすけ
社会福祉法人生活クラブ サー
ビス付き高齢者向け住宅 サポー
トハウス高根台 副主任 介護福
祉士 1995年生まれ



西山剛史 にしやま・たかし
社会福祉法人小田原福祉会 小
規模多機能型居宅介護 潤生園み
んなの家ほたるだ 管理者 介護
福祉士 1982年生まれ



石間太朗 いしま・たろう
社会福祉法人福祉楽団 特別養
護老人ホーム 社の家やしお 施設
長 介護福祉士 1981年生まれ



五宝健介 ごほう・けんすけ
社会福祉法人みねやま福祉会 総
合老人福祉施設 はごも苑 管理
者 介護福祉士 1979年生まれ



水口英一 みずぐち・えいいち
社会福祉法人小田原福祉会 複合施
設（通所介護、サービス付き高齢者向
け住宅）潤生園みんなの家ほりのうち
施設長 介護福祉士 1984年生まれ



調査結果のまとめ

文献調査から、世界的にみても、災害医療・災害看護等のヘルスケア領域ではコンピテンシーやそのフレームワークにかかわる実証的な研究と知見の蓄積がありますが、介護福祉領域では災害時に求められる役割やそのために身につけておくべき能力等に関する体系的な検討は行われていないことがわかりました。国内では、2018年以降、各都道府県において、一般避難所で災害時に要配慮者に対する福祉支援を行う「災害派遣福祉チーム（以下、DWAT）」の組成・派遣が推進されることになり、DWATの活動実績に基づく課題の検討、標準化に向けたチーム員像の設定や研修プログラムの開発等が進んでいます。しかし、これらは概ね災害福祉支援ネットワークの構成団体の代表や研究者らによる意見交換を通じた取組みであり、発災初期からの福祉避難所の運営支援、さらに介護福祉士に焦点をあて、一人ひとりの経験の省察と対話をベースとする検討は不十分であることも明らかになりました。

つまり、**災害時において活躍できる介護福祉士像について、共通認識・実感的理解は未だない**といえそうです。

こうしたなか、1月9日にオレンジの紅谷代表から支援要請を受けた福祉楽団・飯田さんは、愛川舜寿会・馬場さんに声をかけ、翌日には2法人各2人のメンバーを決定、11日未明には4人の第1次派遣隊が出発。以降6法人から第8次に及ぶ派遣が続くことになったのです。

では、発災から10日ほどの輪島市の福祉避難所にどういった職員を派遣するのか——**関係者の集中討議**で、派遣元法人がまず口をそろえたポイントは、「野に放つても絶対に死なない」「動物的カン・危険を察知する直感力」「ざっくり「へっちゃら」などの**サバイバル力**、次いで「観察力・現場力」「受動態ではない」「臨機応変、ルールを変えていける」と**自ら状況に応じて動けること**。第1次派遣隊は4人とも被災地派遣の経験者でした。避難者の支援に関しては、派遣元法人や派遣職員としては「**ふだんと変わらない観察・介護**」ということでしたが、受け入れたオレンジの医師・看護師から「**発災初期から暮らしの視点**」「**目減りする生命力をみられる**」といった医療職と比べた介護福祉士の長があげられたことも印象的でした。とはいえ、その場は福祉避難所。避難者の方々、被災地内外のさまざまな支援者など日々

人の入れ替わりがあるなかで、「〇〇は自分たちの仕事じゃない」などということなく**目の前のニーズに応え、多職種多団体のなかでフラットに意見を交わせること**の重要性も確認されました。

そこで、**派遣職員へのインタビュー**では、自身の安全と健康を守る／避難者の支援／多様な関係者との連携等という3つの観点から、実際に心がけたこと・身につけておいてよかったこと、望ましい特性の両面から議論を重ねました。次頁からの「**発災初期に福祉避難所の支援に携わる介護福祉士に求められるコンピテンシーリスト**」は、**FamSKO派遣の介護福祉士12人の実体験に基づく、現実と理想を併せたハイブリッド型のモデル**ということになります。リストは、全体で5つのコンピテンシ領域、43のコンピテンシーから構成されています。

コンピテンシ領域「**派遣期間を安全・健康にのりきる**」は、準備から移動・現地支援を経て帰着まで、自分の身を守り、体調を整える備えと行動の領域です。

「**被災地派遣の心構え・適応力**」は、変化する状況を見立て、限られた支援期間を意識しながら、できることから前向きに動き、経験を学びとしていく領域です。

この2領域を土台として、現地での避難者支援については「**避難者の生活環境整備**」と「**福祉避難所の特性を踏まえた避難者への関わり**」の2つの領域にまとめられました。前者は、生物として万人共通の人間の生命の営みとその環境を整えること、後者は生活を営む千差万別の人間の人生へのかかわりに重点があります。

「**他の支援者との連携・協働**」は、望ましい支援に向けた他者、他の職種や団体との協働にかかわる領域です。

少しでもリアルなエピソードを共有すべく、いくつかのコンピテンシーについては関連する介護福祉士の語りや写真を挿入しています。ぜひご覧ください。

堀田聡子 | ほった・さとこ

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授
博士（国際公共政策）。社会保障審議会・介護給付費分科会及び福祉部会等において委員。より人間的で持続可能なケアと地域づくりに向けた移行の支援および加速に取組む。



発災初期から福祉避難所の支援に携わる介護福祉士に求められるコンピテンシー

派遣期間を安全・健康にのりきる

法人カラーで用意された個人物品



- 1) 被災地派遣について、職場や家族に説明して了承を得ることができる
- 2) 被災地派遣に必要な物品を思い浮かべ、優先順位をつけて準備できる
- 3) 悪路・長時間の運転に備え、道路状況等の情報を収集・記録しながら、目的地に到達できる
- 4) 避難所周辺の環境とハザードマップ等を確認し、災害時の動きを想定することができる
- 5) 自らの飲食を我慢せず、制限があるトイレ環境でも、排泄することができる
- 6) 自分に必要な栄養と嗜好、調理の制限を考慮して準備し、しっかり食事を摂ることができる
- 7) 車中や大部屋で寝ることを想定した準備を行い、睡眠の質を確保することができる
- 8) 自らの安全と体調管理を第一に、無理をせず、適切な支援ペースを保つことができる
- 9) 自らの心身の状況に注意を払い、気分転換や楽しみの時間を大切にすることができる

排泄物を凝固剤でかためる簡易トイレラップポニー仮設トイレへと変化するトイレ環境に対応。運用がうまくいかないこともあるが、

脱水予防のために水分摂取を心がけ

我慢せず、意識してトイレにいくように



トイレはビニル袋と紙おむつで



ワゴン車の荷台部分を寝られるように改造した

30時間働き詰めと聞いて、支援者が身体を壊しちゃだめだと

寝食ともにすると線引きが難しいが、夜間は緊急でないお願いごとは夜勤者に託す

着いた日にまずシフト作成

など、帰るまでの自らの健康を第一に行動。

	12	13	14	15	16
らこ	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00
クロト	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00
ギョウ	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00
ササ	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00	16:00-18:00 18:00-20:00

即席で作成した勤務シフト

被災地支援の心構え・適応力

テレビで体操のYouTubeが見られるから一緒にやろう

段ボールで片麻痺の人のための台をつくらう

など、できることを考え、使えるものを使い、ないものはつくり、とにかく動く。



避難者も支援者も一緒に体操

水やトイレの制限、日々人が入れ替わり動きが変わる環境、余震のリスク等のなかでも、初めての経験や出会いを楽しむ。

自分が楽しまないと、そこで生活している人を楽しんでもらうことはできない



「楽しむ」姿勢で笑顔は忘れない

自立支援をより意識

口腔ケアの知識を更新

キャンプやサバイバルのための動画を検索

利用者と災害対策について話し合った

事業所と地域とのつながりを

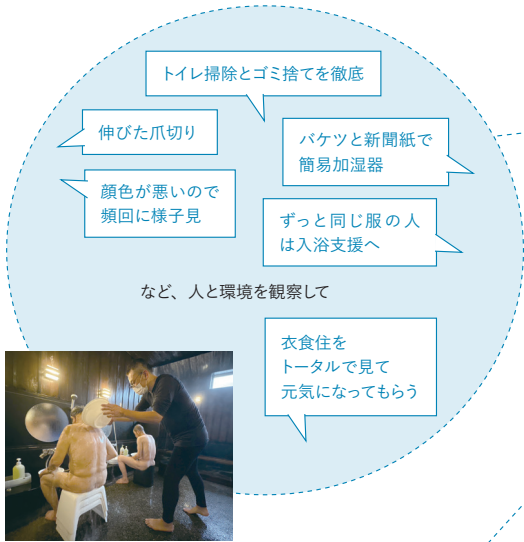
と、支援経験からの学びを日常につなげる。



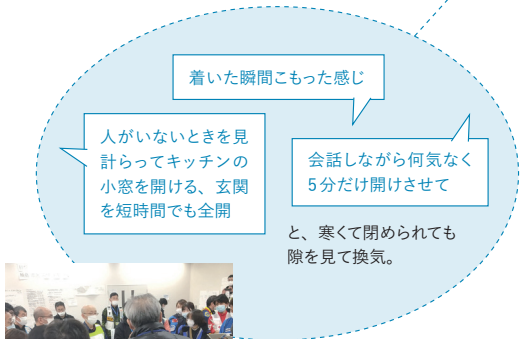
できることはやってもらう

- 10) 被災地とその支援に関心を寄せ、新たな経験に挑むことができる
- 11) 法人・団体の代表として派遣されている自覚を持って行動できる
- 12) 受入先及び被災地に負担をかけない滞在・支援に努めることができる
- 13) 不明や不足があっても、まずできることからやってみようとする事ができる
- 14) 限られた情報から避難者・支援者・避難所の状態を見立て、必要な情報を収集できる
- 15) 変化する状況に応じて、指示を待つことなく自ら判断して自ら行動することができる
- 16) どんな状況もポジティブにとらえ、その環境を楽しむことができる
- 17) 自らの限られた支援期間内に精いっぱい取り組み、次につなげることができる
- 18) 自分の行動を振り返って反省点があっても、くよくよせず前向きに切り替えることができる
- 19) 被災地支援の経験を、日頃のケア、法人や地域の災害対策の見直しにつなげることができる

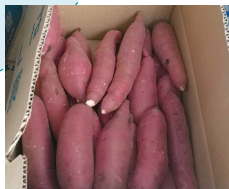
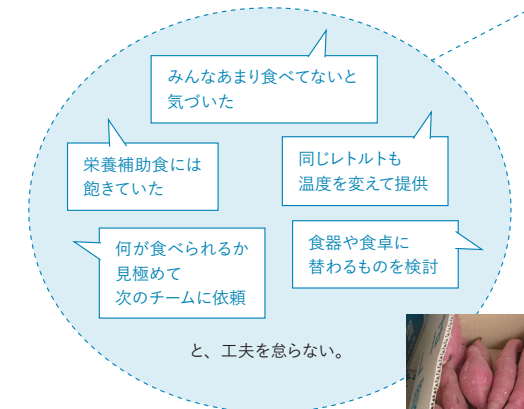
避難者の生活環境整備



皮膚が清潔になれば心はずむ



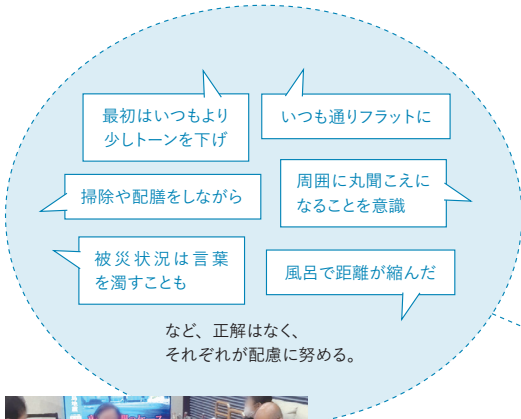
被災地は「密」になりがちなので換気が大事



食べたいもののリクエストで届いたサツマイモ

- 20) 人体の構造と機能に基づき、
根拠を持って
避難者の生活を整える視点を持つことができる
- 21) 空気、光、温度、清潔、音、安全、
プライバシー等の観点から
環境の見立てができる
- 22) 避難者に新鮮な空気の重要性を伝え、
定期的に換気を行うことができる
- 23) 標準予防策を徹底し、
避難者の健康状態を観察して
適切な対応をとることができる
- 24) 物品の整理・整頓、清掃、ゴミ処理等、
生活空間を整え、衛生的に保つことができる
- 25) トイレの安全と清潔を確保し、
常に排泄環境の改善に努めることができる
- 26) 避難者の身だしなみや
ベッド周りの環境を気にかけて、
適宜整えることができる
- 27) 食事摂取量を観察し、
食欲を増進する提供方法や
環境を検討することができる
- 28) 支援物資等を適宜採り入れ、
災害サイクルに応じて
生活環境を見直すことができる

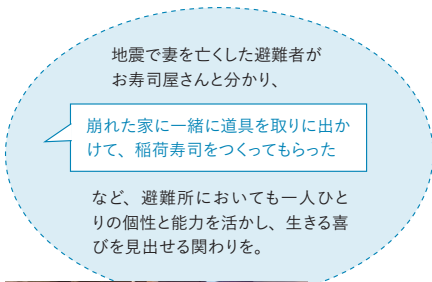
福祉避難所の特性を踏まえた 避難者への関わり



避難者も支援者もごちゃまぜでトランプを楽しむ



避難者と一緒に自宅を見に行く



避難者が稲荷寿司をつくる



全力で繰り上げられた節分

- 29) 避難者に自らの立場を伝えて会話を始め、
関わりを広げていくことができる
- 30) 避難者の多様な背景・被災状況、
心情に配慮した
コミュニケーションができる
- 31) 避難者と生活をともにしながら、
自然な形で
不安や心配ごとに耳を傾けることができる
- 32) 避難者にとって厳しい現実も、
本人が受け止められるように
伝えることができる
- 33) 災害前は自宅で暮らしていたことを前提に、
避難者の能力を見極め、
活かすことができる
- 34) 福祉避難所は
期限付きの生活の場であることを念頭に、
先を見据えた関わりができる
- 35) 避難者の背景、個性と持てる力を踏まえた
エンパワメントができる
- 36) 避難者の安心と楽しみにつながる
働きかけ、レクリエーション等の
活動の提案ができる

他の支援者との連携・協働



移動の車の中でからチームビルディングがはじまる



荷物運びでも、目の前の仕事をやる

- 37) 各々の役割発揮と協働に向け、初対面の人ともスピーディーにチームビルディングができる
- 38) 自らの職能にこだわらず、できることを探し、目の前のニーズに応えることができる
- 39) 互いの気づきを共有し、全体の状況を把握しながら、それぞれの役割を果たすことができる
- 40) 自らの職種の専門性とその限界、他の職種の役割を理解して協働できる
- 41) 他の支援者・団体と腹を割って話しあい、望ましい支援に向けて協力しあうことができる
- 42) 団体内及び適切な人(コーディネーター等)に報告・相談ができる
- 43) 避難者・支援者・避難所等にかかわる情報を記録・蓄積して後継の支援者に伝達できる

団体の役割をゆるやかに確認しつつ

垣根なく手伝う

生活を整えるという基本

オーバーワークは総崩れに

と共有すべきことを伝え、改善に向けて提案。意見の衝突は、避難者にとっての最善の観点から対話・対応。



はじめて会う団体や専門職と対話し連携していく



手書きの日報が写真で共有される

介護福祉士の本来の役割と専門性が試される被災地支援 金山峰之

私は今回、FamSKOの取り組みで福祉避難所支援に赴いた介護福祉士資格を持つ方々にインタビューを行い、そのコンピテンシーを分析する機会をいただきました。本稿ではこの分析を通じて感じたことを3つお伝えしたいと思います。

1 まず、誤解を恐れずに言うならば、福祉避難所で介護福祉士に求められることに特筆すべき目新しいものはありませんでした。言い換えると、介護福祉士として求められている専門性は福祉避難所であっても、日頃働く日常的な介護現場であっても変わらない、普遍的なものだということです。ただし、福祉避難所という非日常的な場ではこの普遍的な専門性をフルに発揮することが求められます。インタビューした12名は日頃勤める介護現場よりも専門性を強く先鋭化していたことが大きな特徴でした。

例えば彼らが行っていた実践は、避難者とコミュニケーションを図りながら関係性を構築すること、避難者の心身の状態や置かれた環境・状況を確認しながら、避難者の生活意欲や活動意欲を引き出し、介護職チームや他職種と連携しながら、自立した生活を営めるように必要な支援をするというもので、介護福祉士なら誰もが当たり前やって然るべきことでした。

しかし、福祉避難所は関係性が全くない人たちと、ライフラインや物資に制限がある非日常的な空間・状況で介護をするという現場です。どこでどう生活していたかわからない避難者、今後家に帰るのか、別の場所へ移るのかさえ曖昧な中、介護福祉士たちは自ら主体的に動き、限られた情報の中でその人の状況・状態に応じた自立支援を自ら判断、実施していました。時に有り合わせのものを使って少しでも生活環境を整えようとしたり、心身機能・身体構造に応じた生活動作を促したり。普段ならチームで検討すべきことも一人で即断即決することもありました。これは、普遍的に求められる専門性を日頃から実践していること、一人の自立した専門職としての

知識・技術・倫理が備わっているからこそ発揮できるものであろうと強く感じ、福祉避難所支援の介護職派遣において重要な要素だと思いました。

2 次に、印象深かったことは、皆が福祉避難所という非日常的な状況をポジティブに捉え、専門職として人間として自身の成長機会と捉えている点でした。「不謹慎かもしれませんが楽しかったです」「勉強になりました」という多くの声が多くそれを物語っています。人によっては整備されていない環境にストレスを感じたり、体調を崩す方もいるでしょう。ですから自己統制力と自己実現意欲を持ち合わせているかは重要だと感じました。また被災地支援が初めてという方は「いつかどこかで災害が起きたらこの経験を活かしたい」と言い、被災地支援経験を重ね、次に活かそうとするスタンスは本人にも社会にとっても大切なコンピテンシーだと感じました。

3 一方、課題に感じることもありました。介護福祉士たちの充実した声はFamSKO各法人の理念と、受け入れ側の福祉避難所運営者の理念がある程度合致しており、目指す方向性が全体に効いていたと感じます。これはどんな組織運営においても言えますが、組織のビジョンの共通認識と浸透はとても大切です。今後想定される大災害ではよりフォーマルで大規模な団体、組織、関係者の有機的連帯が求められます。そうした中、大規模介護職派遣、DWATや他団体との役割明確化、福祉避難所における介護福祉士の支援のあり方など、一定の共通認識がこれまで以上に重要となるはずですが、各方面とのコンセンサスを経たガイドラインや方針の作成、浸透が急がれると思いました。

かなやま・たかゆき ケアソーシャルワーク研究所 所長 法政大学大学院 地域ウェルビーイング研究所 特任研究員 介護福祉士/社会福祉士/准看護師 ※令和6年3月31日現在



非日常の「楽しい」に込められた意味

上垣喜寛（記者・映画監督）

「楽しい」という言葉は、時に軽い娯楽や瞬間的な喜びを連想させます。しかし、この言葉の持つ意味にじっくりと向き合うと、もっと深い意味があることに気づかされます。古代の哲学者たちは、瞬間的な快楽を超えた「幸福」について議論を交わしてきました。彼らが追い求めたのは、学びや成長を通じて得られる内面的な満足感でした。日常の行動や困難に直面する中で、自らの進化や成熟を感じる時、初めて本当の「楽しさ」が実感できるといいます。

現代でも、災害支援という非日常の厳しい現場で介護福祉士たちが感じた「楽しい」は、この深い満足感と一致しています。未知の環境に挑むことで得られる思いがけない学び、そして日常で培ったスキルが新たな状況で発揮される瞬間に感じられるものです。

令和6年能登半島地震の被災地に、6法人の介護福祉士たちは向かいました。ある介護福祉士は、被災地に向かう道中で他愛のない会話を楽しみました。初対面でありながら、同じ目的を共有し、共に支援に向かう「仲間」としての結びつきが生まれていました。現地では、通常は辛いはずの車中泊をも楽しむ姿も見られました。何度も被災地支援に参加している人は、「次はどんな状況か」と、未知の状況に心を躍らせました。これらの姿勢は、単なる「助ける」ことを超え、自らの可能性を広げる機会として捉えている証です。

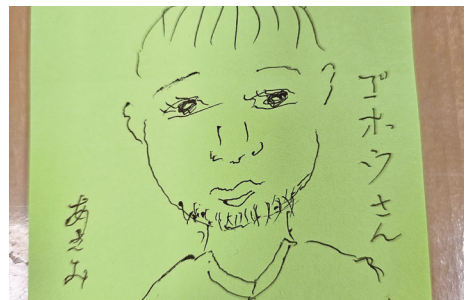
一方で、派遣する側の経営者は、「楽しい」という感覚はさておき、被災地に入ってもポジティブな姿勢を持ち続けられる職員を選びました。派遣される職員に求められる資質として、コミュニケーション能力や新しい経験から学び取ろうとする意欲が重要視されています。これは、厳しい現場で成果を出すために欠かせない要素です。

介護福祉士たちが語る「楽しい」という言葉は、日常的な娯楽とは異なります。被災地という非日常

の厳しい環境で、自らの限界に挑戦し、そこに新たな発見や成長を見出すことで得られる深い満足感です。アリストテレスは「エウダイモニア（真の幸福）」を、人間が自身の能力を最大限に発揮し、徳を追求することにあると考えました。介護福祉士たちが非日常で感じた充実感は、この考えに近い「幸福」の一形態といえるのかもしれませんが。



非日常の被災地で日常を取り戻していく。ホッとできる環境を取り戻す姿を見られるのは、喜びであり楽しさでもある。



職員の活動記録に残る1枚の写真。避難者が描いてくれた似顔絵だ。「楽しい」の一言の背景には、現地での様々な出会いや交流の記憶がある。

うえがき・よしひろ 記者・映画監督
2008年からフリー記者として取材を続ける。14年にNPO法人「自伐型林業推進協会」を設立。映画『壊れゆく森から、持続する森へ』を監修。



災害が起こっても暮らしは続いている

暮らしに伴走できる介護福祉チームは最強だ

紅谷浩之（医療法人オレンジグループ 代表）

2024年1月3日、前日に引き返し、発災から48時間後の夕刻、輪島市に私たちはたどり着きました。最初の避難所を訪れたとき、そこで見たのはフレイルが進行した高齢者でした。発災直後の大津波警報を受けて、頑丈な建物の3,4階に設置された避難所。当然、階段を登って避難してきたはずの高齢者たちが、2日間じっと狭いところに動かずにいた結果、壁づたいによろよろとしか歩けない状態でした。発災急性期は、レスキューと救急救命のフェーズ。と思っ

ていましたが、超高齢社会の災害では、フレイルの進行や持病の悪化、生活環境の変化が負荷となって起こる体調変化が早期から同時進行で進んでいることを感じました。「避難所には病気がない人が避難していて、病気になったときは救護所で治してもらって避難所に戻る」という避難所運営にはこの前提があるように感じました。「地域には病気がない人が暮らしていて、病気になったときは病院に行って治ったらまた地域に帰ってくる」という時代から「地域には病気を持つ人が暮らしていて、生活に医療サポートやケアが伴走することが求められる」という時代に地域社会が変化していったの（地域包括ケアシステム）と同じような変化を、災害時の避難の考え方にも取り入れないといけないと直感しました。

その後、地元社会福祉法人から福祉避難所の運営を引き継ぎました。普段、私たちが在宅ケアの現場で関わる高齢者や障害者の皆さんを支える避難所です。病気や障害と伴に生きる人たちの体調や人生を支えるためには「暮らしの営み」を中心に据えることの重要であることは在宅ケアの中でもいつも感じています。そこに必要なのは、医療の見立てを中心にしたチームではなく、暮らしを支える介護や福祉の視点を根っこに持ち、医療は介護福祉の動きをサポートするようなチームづくりです。この福祉避難所の運営には介護福祉の見たてと動きが必ず必要、まさに

それを考えていたとき、福祉楽団の飯田大輔さんから連絡が入り、たちまちFamSKOが結成され組織だった介護福祉士チームの現地入りが始まりました。

次々とやってくるサポートの必要な避難者たちを受け入れ続け、避難所で感染症が流行することもありました。避難所の中で看取りを実践することも2回ありました。医療の見たてや整えも重要でした。医療の重要度が高まると、医療者はそれを整理する。医療者の整理や分類、優先順位決めは、人の暮らしを病院のように断片化しがちです。人の暮らしを病院のように断片してしまいがちです。福祉避難所で、私たち医療チームがつい医療に必死になってしまったときも、ハッと気がつくと、換気がされた気持ちいい空気が寒くなりすぎないように配慮されながら避難所に流れ、温かさにこだわった食事が配膳され、「リハビリ」のような押しつけではない気持ちよく身体を動かす機会があり、トイレや玄関もきれいに整頓された暮らしの場が常にありました。

そこには、医療者だったら対面してしまいそうな場面で、必ずその人の横に立ち同じ方向をみる介護のプロフェッショナルがいました。

人は本当に大変な状況でも、暮らしの営みをつづけるなかで、ほっとしたり笑顔になったりする。そんな人の強さを感じさせてくれる連携でした。これから日本各地で予想される超高齢社会の災害に、アドレナリンを出して腕まくりをして飛んでいく医療チームだけでなく、いつもの暮らしの営みをいつものように支える介護福祉の専門家チームが、したたかに災害支援の経験や知見を積み重ねることが期待されます。

べにや・ひろゆき 医療法人オレンジグループ 代表
医師として在宅医療や地域医療に従事。2011年福井県内初の複数医師による在宅医療専門クリニックを設立。20年に軽井沢市に『ぼっちのロッヂ』を開設。



第3章

バックオフィス側のコンピテンシー

文：FamSKO

平時の準備

□ 保険

労働災害保険の加入状況の確認と、それに上乗せするような業務災害保険、傷害保険の加入について検討する。

→ 出入りの保険業者さんと平時から話をしておく。

□ 教育訓練

被災地に派遣される可能性のある介護福祉士には平時に必要な教育訓練を行っておくことと、発災時に派遣される可能性があることを告知しておく。

→ 派遣される可能性のある介護福祉士自身のみならず、家族やパートナーの理解も必要になる。

→ また、その介護福祉士が所属している施設や部署の管理者にも派遣される可能性があることを予告しておく。いざとなると、目の前のシフトのことしか考えられなくなる管理者も多いのも事実。

□ バックオフィスのコアメンバー

バックオフィスの被災地支援のコアメンバー（事務局的なもの）を決めておく。

→ 相談のしやすさ、被災地の状況がイメージできる人が適任。

派遣されている介護福祉士の心配をしたり、励ましも大事。

メッセージアプリのやりとりではなく、たまに電話で話すことも大切。

派遣前

□ 安全第一・支援は第二

派遣する職員の安全が第一であり、支援活動は第二であること、危険を感じる場合や不明の点がある場合は支援活動を中止してもよいことを口頭で伝える。

□ 天気や日没等の確認

支援活動を行っている現地の、天気、日の出、日の入、満潮時刻を確認する担当者を決めておく。ICTツールやスマホで、これらの情報が共有しやすい環境をつくる。

□ 位置情報の確認のしかた

派遣された職員の移動中や、拠点となる活動場所を離れて活動する場合は、その職員がどこにいるのかの位置情報を共有するアプリを使用する。余震や警報が出されたときの安否確認にも役に立つ。

□ チームの編成のしかた

1チームの規模は4～6人がマネジメントしやすく、最大でも8人程度とする。

→ 人数が多ければ良い活動が展開されるとは限らない。チームのリーダーとなる人を明確に決める。

→ 行政やほかの福祉避難所とのやりとりをするコーディネート役を決めておく。

□ 被災地での活動期間は最大でも5日が限度

前後1日は移動日と引き継ぎ日を確保しておく。

→ 疲労の蓄積と緊張は、事故につながる。移動日に運転がある場合は、被災地から離れた場所でホテルなどでの宿泊を検討し、長時間の運転にならないように配慮する。

□ 単独行動はしない

被災地では休憩時間なども含めて単独行動はしないことを口頭で伝える。チームの中では、だれが、どこにいるのかを口頭で申し送ることを徹底する。

✓ 現場をささえるバックオフィスのチェックリスト

(担当：飯田大輔／福祉楽団)

被災地支援にあたって、バックオフィスに求められることは大きく2つです。平時からの準備と訓練と、派遣するときの確認事項と現場サポート。バックオフィスの適切な働きは、万が一の事故の際のリスクを軽減させるだけでなく、派遣される介護福祉士に安心をもたらし、効率的な活動につながります。

□ 活動のスケジュールを立てる

派遣チームが自分の活動がいつまでであるのかを認識しておく。終わりが見えていたほうが頑張れるし、事故の予防につながる。

□ 発災後3日～1週間くらいが活動開始時期

→発災日～3日の被災地は「急性期」なので、少し落ち着いて情報が整理されはじめたときが介護福祉士の活動開始時期となる。

□ 活動終了時期の見込みを立てる

介護福祉士の支援チーム（DWAT）は、派遣開始後10日くらいのうちに、活動終了時期の目安をつける。（概ね、発災日から30～50日程度で終了させる）

→活動終了時期を福祉避難所や被災地の行政に予告しておくことで、被災地側の準備や行政側の混乱が少なくなる。

□ 移動ルートの確認

→支援に向かうルートは、通常の移動ルートが使えないことが多い。しかし、現地では人やモノが動いている。どういうルートで移動しているのか、または、どこには行けないのかの見当をつけておく。

□ 被災地から離れた場所の活動拠点

被災地から離れた場所で、インフラが整っているところを支援活動の現地拠点として定めることを検討する。

→新幹線の駅や空港、高速道路のインターチェンジの近くで、駐車場があり、ホテル、ガソリンスタンド、コンビニなどが通常どおり営業しているところの見当をつける。

□ 報告を求めすぎない

現地で起きていることをリアルタイムで、細かく把握しようとするのはやめる。派遣された介護福祉士を信頼し、任せていくスタンスが必要。必要な情報は日報を1日1回送ってもらうくらいでいいかもしれない。バックオフィスが過度に干渉することは支援の妨げになる。

□ 補助金の活用

介護福祉士の派遣に使える制度や助成団体の助成金の情報収集や手続きをする。

□ 経験の共有

派遣された経験、被災地支援を行った経験を職場内で共有する機会をつくる。

経験を語りとして共有することで、被災地の理解につながるほか、派遣のストレスを緩和させる効果も期待できる。

□ 支援の経験で、支援の受け方がわかる

被災地支援を経験しておく、自分たちが被災者になったときの支援の受け方がイメージできるようになる。

→役割分担や物品の整理や、運搬方法などが具体的に理解できるようになる。

□ 行政との調整

県庁や中央省庁とのやりとりは、バックオフィスからでも十分できる。

現場のニーズを把握して、行政の支援が必要だと判断されるときには、バックオフィスがその援護をすることで、現場が効率的に活動できる。

□ メディアへの発信

ネットニュースや、新聞やテレビなどに活動が掲載されることは、何より現場の介護福祉士のやりがいとなる。取材対応やプレスリリースも積極的に検討する。

✓ 平時に教育訓練しておくべきことチェックリスト (担当：井口健一郎／小田原福祉会)

□ 車両の運転技術、操作方法

ドライバーは、普段から運転をしている人、運転の経験がある人を選ぶ。車の点検(ブレーキ、ライトなど)の仕方、タイヤ交換と、ジャンプスタートの仕方、ブースターケーブルの使い方を平時に1回でも練習しておくことと自信につながる。

日本自動車連盟 (JAF)

公式 YouTube

<https://www.youtube.com/@jafchannel>



□ 車両の性能、悪路、雪道の運転

自動車は4輪駆動の車両を原則として、悪路の走行を補助するような安全性能(雪道モードなど)、スマホの充電できるコンセントやコネクタがあるものを平時から導入しておくことと車両選別に困らなくなる。また派遣するときの荷物の量もかさむので、積載量があるものが良い。

□ ヘルメットや安全靴の重要性

たった50cmの高さから鉄板の上に転倒した時の衝撃荷重は、脳しんとうを超えて頭蓋骨骨折を引き起こすほどになる。ヘルメットを着用することで、衝撃は1/10以下に軽減できる。安全靴はJIS T 8101安全靴を基本とし、機能面の規格である耐踏抜き性(P)か、耐切創性(C)を満たしたものを用意しておく。



□ 燃料の特性や危険性について

非常時に使われる燃料は機械や設備によってさまざま。間違えて使えば火災や爆発の可能性があり、機械が壊れる。ガソリン、軽油、灯油など燃料の違いやそれぞれの特性を理解しておく。特にガソリンの危険性は平時から知らせておく。

□ アウトドア経験、ソロキャンプ

被災地支援は、自分自身の生活を成立させるところからはじまる。テントの設営や、屋外の調理、寝袋で眠る経験などを1回でもしておくこと、被災地での生活をイメージしやすくなる。

キャンプを楽しんでおく経験は非常時にも役に立つ。

□ 応急救護訓練

ケガの応急手当、止血方法、心肺蘇生法、AEDの使い方は平時に訓練しておく。普通救命講習を受講しておくことと良い。

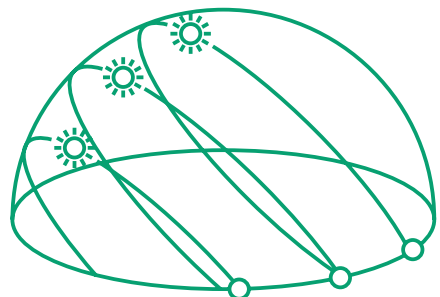
□ 方向の見方、天気予報の見方

天気や防災アプリはスマホに置いておく。普段から、天気や風向きをこまめに気にする習慣が大切。当たり前と思われるような「太陽は東から昇って西に沈む」という自然の見方がわかっているならば、スマホが使えないときも、読み取れる現象が広がる。紙の地図の見方も練習しておく。

□ 日の出、日の入り

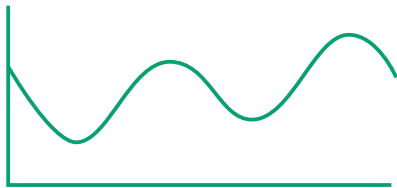
停電した被災地の夜は真っ暗。日没後の屋外作業は原則禁止とする。日の出、日の入(日没)の時間を把握し、日中の活動を計画的にすすめる。

スマホで簡単に調べられるが、暦(春分、夏至、秋分、冬至など)の理解がある程度頭に入っているならば、スマホで調べなくても、季節毎の日の出、日の入の時刻の見当をつけることができる。



□ 満潮、干潮の見方

海面の高さが1日のなかで、一番高くなるとき（満潮）、一番低くなる時（干潮）が2回ずつある。海面の高さは一定ではなく、毎日、ゆっくりとしたリズムで変化している。台風や津波と満潮時刻が重なると海水面が高くなるので危険性がさらに大きくなる。満潮と干潮の時刻をスマホで調べてみる。

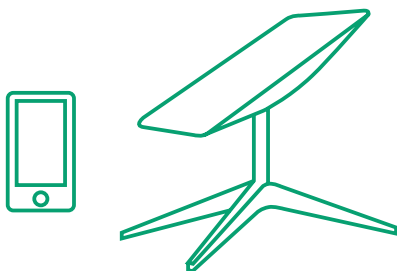


□ ICTの使い方

メッセージアプリは、あとから参加した人でも、参加する前のメッセージのやりとりが見られるアプリを使うことがベター。ファイルやデータを共有できるクラウドサービスや、位置情報を共有できるアプリを使うとバックオフィスの支援能力も上がる。また、非常時に新たに使うアプリではなく普段からそういう機能のあるアプリを使っておくともスムーズ。

□ スターリンクを使っておく

スターリンクとは地球上のほぼ全域での衛星インターネットアクセスを可能にするもので、小さな旅行カバンくらいの通信機器。月1～3万円くらいの法人契約プランも用意されている。通信はインフラであり、生命線。業務連絡はもちろん、家族や恋人への連絡手段を確保しておくこと介護福祉士の安心感につながる。



□ 位置情報の共有の仕方

被災地での活動中に、余震や警報に遭遇することは多い。そのたびに、バックオフィスが動揺したり、一緒にいる仲間が心配したりしていたのでは疲れてしまう。活動拠点から離れるときや、地域活動などに従事したりするときは、バックオフィス側やグループ内で位置情報が共有される仕組みをつくっておく。

□ ハザードマップの見方

ハザードマップとは、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図にしたもの。市町村や国土交通省のホームページなどで確認できる。被災地に行くときは、活動の地域や拠点となる場所がハザードマップのどの位置にあるか、どのようなリスクがある地点か、活動するに安全な地点なのかを確認しておく。紙に印刷したものを持っておくと、通信が不安定なところでも安心。

国土交通省ハザードマップ
ポータルサイト
<https://disaportal.gsi.go.jp>



□ 標準予防策とワクチネーション

被災地では感染症のリスクが高まる。麻疹、風しん、おたふく風邪（流行性耳下腺炎）の抗体があるかどうかは平時に確認しておくこと。また標準予防策は、「標準」なので平時でも非常時でもやることは同じ。普段の介護実践と訓練が問われる。手指のアルコール消毒と換気が確実に実行されることは、感染症予防の大前提。

□ 簡易トイレを使っておく

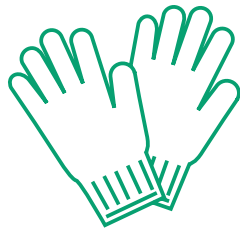
水洗トイレが使えなくなっている可能性が高い。簡易トイレの使い方や、排せつ物の処理の仕方など一度でも体験しておくことが大切。防災訓練のときにじっさいに簡易トイレを使ってみよう。

✓ 発災直後に介護福祉士を派遣するときの 持ち物チェックリスト

(担当：大林喬充／薫英会)

安全防護服・応急用品

- ヘルメット JIS規格
- ヘッドライト
- ベストやアウター 社名入り
- レインコート JIS T8127
- 安全手袋
・ガレキの撤去や物資運搬などの業務も
- 軍手
- 安全靴 ハイカット推奨
・物資の運搬や被災地を歩くときには必須
- 普通のスニーカー
- 長靴
- 懐中電灯
- 乾電池
- コードリール・延長コード
- ブルーシート



車両関連

- ハイエース 貨物タイプ 4輪駆動車
- スタッドレスタイヤ
・冬季または支援活動が冬季に及ぶ場合
- 変換アダプター
・車両にAC100V電源がない場合
- 被災地支援表示ボード
- けん引ロープ
- ブースターケーブル
- 簡易スコップ
- 燃料
- 燃料容器

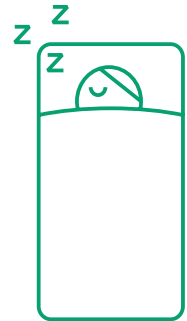
介護福祉士の食事関連用品

- カセットコンロ
- 簡易調理具
- 非常用食料 目安 1日あたり
男性 2,700cal 女性 2,100cal
- 飲料水 目安 1日あたり飲料水用 2ℓ 調理用 1ℓ
- 自分の好きなお菓子など

介護福祉士の生活用品

寝具

- 簡易ベッド
- 簡易マット エアマット
- 寝袋
- 耳栓



清潔保持用具

- タオル 速乾性のものを推奨
- シャワー付きポリタンク 容器は白色でサーファーなどが使用するものなど
- ウェットタオル 身体を拭くもの
- 着替え
- 簡易トイレ ラップボン
- トイレットペーパー

日用品

- トラベルグッズ 歯ブラシなど
- ティッシュペーパー
- ゴミ袋 45ℓ or 90ℓサイズ
- 生理用品
- 灯油と石油ストーブ 電源不要のもの
・冬季の場合
- クーラーボックス

介護福祉士の応急救護

救護用具

- 救急セット ガーゼ、絆創膏、消毒薬ポビドンヨード等
- 大き目のガーゼ
- 氷枕・アイスノン
- とげ抜き
- ピンセット アセトアミノフェン錠 500mg
ロキソプロフェン錠 60mg
ブスコパン錠 10mg
プリンペラン錠 5
フェキソフェナジン塩酸塩錠 60mg
- 爪切り
- 常備薬※ ラックビー錠
リンデロンV軟膏 5g
白色ワセリン

感染対策

- 使い捨てサージカルマスク
- N95マスク
- 使い捨て手袋
- 使い捨てガウン
- 消毒用エタノール 食品添加物
- 手指消毒用エタノール 医薬部外品
- 次亜塩素酸ナトリウム ハイターやピューラックス

バイタルチェック用品

- 血中酸素飽和度モニター
- 体温計
- 血圧計
- 血糖測定器



※監修：紅谷浩之医師

電子機器・PC関連

通信機器

- スターリンク
- スマートフォン
- ノートパソコン
- 各種充電器

インストールアプリ

- Facebookメッセージャー
- LINE
- Googleマップ
- Googleドライブ
- Googleスプレッドシート
- NHKニュース・防災アプリ
- Yahoo!防災速報アプリ

文房具

- ボールペン
- マジック
- メモ帳
- A3用紙 白紙
・表示などを手書きですぐに作れるように
- A4用紙 白紙
- ガムテープ 名札としても使える
- ハサミ

貴重品関連

- 現金
- クレジットカード
- 運転免許証
- マイナンバー
- 介護福祉士等の資格証の写し

✓ 介護福祉士を送り出すときに伝えるべきことチェックリスト

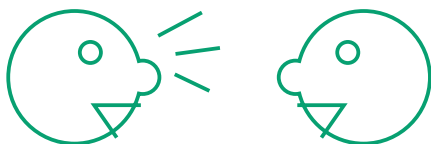
(担当：馬場拓也／愛川舜寿会)

□ 自分の命を最優先に

何より自分の命を守ることが最優先です。
無理に活動せず、安全を確保しましょう。

□ 助けを求める

問題や困難が生じたら、すぐに周囲に助けを求めてください。
周囲と協力しながら解決策を見つけることが大事です。

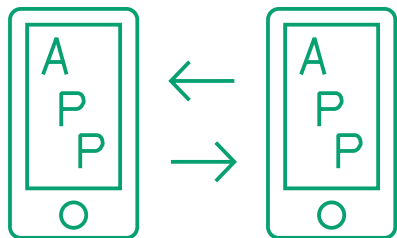


□ 単独行動は避ける

単独行動は禁物です。
自分の居場所や予定は必ず他のスタッフに伝え、連携を常に意識しましょう。

□ 連絡手段とアプリ確認

報・連・相に必要な手段やアプリケーションは事前に確認し、確実に使えるようにしておきます。
移動中に、支援チーム内でコミュニケーションをとっておくと、スムーズな支援活動につながります。



□ リアルタイムな位置情報の共有

GPSやアプリを使い、自分の位置情報をリアルタイムに共有することで、迅速な対応や指示系統がスムーズになります。

□ オーバーワークの防止

被災地支援ではつい無理をしがちです。いつも以上に休息を心がけてください。



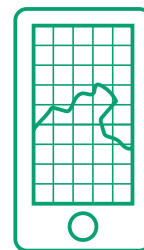
□ 運転は無理しない

長時間の運転は避け、疲れを感じたらこまめに休みましょう。
被災地では明るい時間帯のみ運転し、時間より安全を優先してください。



□ 移動記録を残す

移動中の地理ポイントや通過時刻を記録し共有することで、後続の安全な運行プランにも活かすことができます。



□ 柔軟に対応する

被災地では予定通りに進まないことがほとんどです。
予定の変更や即時対応が求められる場面では、柔軟に対処しましょう。

□ 適度な楽観性を持つ

前向きな視点と楽観性を持つことで、モチベーションを維持できます。

✓ 福祉避難所で

(担当：飯田大輔／福祉楽団)

活動開始時にやるべきことチェックリスト

- 活動場所が安全であるかの確認
 - ・建物は耐震基準を満たしているか
 - ・ハザードマップの確認（危険な区域にないかどうかの確認）
 - ・ガス漏れや漏電がないかどうかの確認
 - ・火災感知器やスプリンクラーは作動しないことを前提に火災予防の重要性の確認

- 地震発生時の対処方法や、津波警報、大雨洪水警報発令時の避難場所の確認

- 勤務シフトをつくる
(十分な休憩時間がとれるように予定を組む)

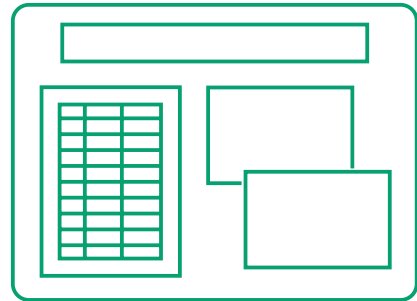
- 活動場所のアセスメント
 - ①換気の方法や窓の形状
 - ②食料や衛生用品など必要物資
 - ③トイレの状況
 - ④ゴミや不潔物の置き場所
 - ⑤食事の提供方法や内容
 - ⑥床や寝具などの衛生状態
 - ⑦物資の保管、整理の状態
 - ⑧不足している物資や設備の把握
 - ⑨避難者のADLや、障害の程度、人数、基礎疾患のある人の把握

- 換気のやり方を確認

- 手指消毒ポイント（場所）をつくる



- 支援チームの
休息場所、活動拠点をつくる
- 活動拠点の整理整頓、
物資がわかりやすいように表示、
置き場所を決める



- 持ち込んだ物資や設備の
棚卸表をつくり、
置いてある場所の共有
→壁に表示する、ICTの活用など工夫
使うべきときにどこにあるのかわかるように工夫する（衛星電話や救急用品など）

- ほかの支援団体の活動状況を把握して
自分たちの役割を確認

- 換気、水分、栄養、清潔（身体と環境）の
保持について
応急的な整え方を考える

- 掃除や消毒の時間、調理担当など
おおまかな役割分担を決める

- 避難者への自己紹介や、
避難者でも動ける人には理解を求め、
仕事を割り振る

意外と知らない? おさえたいミニ知識

燃料 ガソリンの室内での保管や車内での持ち運びはできるだけ避けよう

ガソリンは室温でも揮発し静電気のようなわずかな火種からでも爆発的に引火、燃焼します。室内や車内での保管や運搬には厳重な注意が必要です。ガソリンの運搬は、消防法の基準を満たした金属製のガソリン携行缶か、国際連合（UN）勧告の基準に適合している容器で行う必要があります。やむを得ず、室内保管するときや、車内に積んで運搬するときは、これらの専用容器で密封し、常時換気をしてください。段ボールなどの絶縁物を容器の下に敷いてはいけません。また、ガソリンの容器を開けるときは、静電気による爆発を防ぐため使用者自身の足元と携行容器本体を接地させ、エア抜きしてからキャップを開けるようにしてください。

軽油や灯油は、ガソリンに比べると安全ですが、炎天下など 40℃を超えると引火します。また、何らかの事情で霧状になると常温でも引火します。夏の直射日

光が当たる場所や、炎天下の車内などに置くと引火する可能性があります。取り扱いには注意が必要です。

ガソリン、軽油、灯油などを間違えると機械やエンジンが故障します。間違わないように容器の色で分けておくと良いでしょう。また、燃料は保管しておくとも劣化します（腐ります）。長期保管する場合は、半年くらいで入れ替えることが望ましいとされています。

POINT

- ガソリンは特にあぶない
- 専用の容器で運搬・保管する
- 燃料容器には内容物を明確に書く
- 水やゴミが燃料に入らないように注意する
- 自動車や発電機側にも燃料を明確に記載しておく
- 消火するときは消火器で、水で消火しない

（飯田大輔／福祉楽団）

自然現象 自然の現象を把握して読み取ろう

被災地で支援活動する場合、自然現象の知識を持つておくことが、安全確保のために大切です。まず、日の出と、日の入り時間を把握しておくことが大切です。日中に活動できる時間帯を把握し、安全で効率的な活動計画の立案に役立ちます。満潮（まんちょう）や干潮（かんちょう）など潮の満ち引きを把握しておくことは、沿岸部や河の近くでの支援活動において重要です。満潮時には海水面が高くなるため、津波や台風による被害が拡大しやすくなります。地球に対して月と太陽が直線上に重なるとき、月と太陽による起潮力の方向が重なるため、1日の満潮と干潮の潮位差が大きくなります。この時期を大潮（おおしお）といいます。大潮は干潮と満潮のときの差が大きくなる時期です。

スマホは便利ですが、スマホが使えないことも想定されます。紙の地図の見方も練習しておきましょう。紙の地図は通常、北が上になっています。カーナビなどの表示も北を上にする設定（ノースアップ）ができます。それで、自分がどこにいるのか、どっちの方角を見ている

のかを確認してみましょう。方位磁石（コンパス）がない場合、太陽は東から昇り、西に沈むため、太陽の動きを見て方角を確認することもできます。

天気予報は、随時確認しましょう。自分が住み慣れた地域の気候と被災地の気候は異なります。風向きや気温、雪、雨の降り方などを把握しておくことは安全な活動の第一歩です。現地の人に、気象を聞くことも大切ですが、被災地では「これくらいなら大丈夫」というような「正常性バイアス」（安全バイアス）があるため、適切な判断ができないことがあります。客観的な情報やデータで判断することを訓練しておきましょう。

POINT

- 日の出、日の入りの時刻を確認する
- 満潮、干潮の時刻を確認する
- 北がどっかがわかるようにする
- 天気予報は随時確認する

（榎田啓／みねやま福祉会）

建物 活動する場所は1982（昭和57）年以降に建てられた建物で

建物の「耐震基準」とは、建物が地震にどれだけ耐えられるかを示す最低限の性能基準で、これは「建築基準法」によって定められています。この耐震基準を満たさないと新しい建物を建てることができません。

耐震基準は過去の地震から学んで、何度も見直されてきました。特に1981年6月1日の改正が大きな変更点です。この改正前の基準を「旧耐震基準」、改正後の基準を「新耐震基準」と呼びます。さらに、2000年の改正で現行の耐震基準が設定されましたが、ここでは「旧耐震基準」と「新耐震基準」の理解が重要です。

被災地で支援を行う際や避難者と支援者の安全を確保するためには、この耐震基準の知識が必要です。耐震基準を理解しておくことで、安心感が得られます。

POINT

- 1982年以降の「新耐震基準」で建てられた建物で活動をする
- 2001年以降に建てられた「現行の耐震基準」で建てられた建物だとさらに良い

（馬場拓也／愛川舜寿会）

食事と栄養 食事は必要なエネルギーとタンパク質を把握しよう

避難生活において提供される食事は炭水化物が多く、タンパク質の不足が起こりやすくなります。必要なエネルギー量とタンパク質を把握しておく、自分自身のみならず避難者の適切な食事と考えられるようになります。エネルギーは主に米やパン、タンパク質は、ツナやサバ、鶏肉などの缶詰類や、常温保存可能な豆乳飲料や、プロテイン飲料などがあります。エネルギー量は、年齢、性別、身体活動レベルから、およそ必要な量が推測できます。タンパク質は、男性65g以上、女

性50g以上を1日に摂るようにしましょう。特に、高齢者のフレイル対策には、タンパク質が重要であり、高齢者は最低でも1日に体重1kgあたり1.0g以上のタンパク質を摂ることが推奨されています。

1日の推定エネルギー必要量		身体活動レベル（ふつう）	
		男性	女性
年齢	18～74	2,600 - 2,700kcal	1,850 - 2,050kcal
	75以上	2,100kcal	1,650kcal

（大林喬充／薫英会）

被災地ワード 被災地で飛び交うワード3選

DWAT

災害福祉支援チーム
Disaster Welfare Assistance Team

大規模災害発生時に専門職（介護福祉士・社会福祉士・保育士等）を中心に避難所に派遣されます。避難生活を送る要配慮者の、時間的経過によって変化する福祉ニーズに的確に対応し、避難生活中における生活機能の低下や要介護度の重度化などの二次被害等を防止することを目的に活動します。

DMAT

災害派遣医療チーム
Disaster Medical Assistance Team

災害急性期に活動できる機動性を持つ医療チームのこと。災害現場においては、怪我を負ったり、病気の症状が現れてから、どのような処置を行なうかが、生死やその後の病状を左右します。さまざまな状況に対して、迅速な処置を適切に行なうため、医師、看護師等で構成されています。

福祉避難所

災害時に住民が臨時に生活する宿泊可能な施設を「避難所」と呼びます。その中でも、高齢者、障害のある人、乳幼児、妊産婦など、避難所の生活において特別な配慮が必要な方とその家族を受け入れる避難所を「福祉避難所」といいます。避難者の状況に応じて開設されるため災害時に直ぐに開設されるものではありません。

（松井千佳／生活クラブ）

第4章

FamSKO座談会

福祉支援チームFamSKOからの提言



文：平井明日菜
撮影：鈴木貴太郎

——能登半島地震が起きたとき、それぞれの法人を率いるトップたちはまず何を、どう思ったか？

即時対応が成功のカギ

榎田：僕は、何かしなくてはと思って、国や全国社会福祉協議会など全国組織の動きを待っていましたが、私たちの動きのほうが早くなりました。

時田：大きな組織なので、意思決定のプロセスが複雑なのでしょう。私たちも、「支援に行かなきゃ!」とは思っていました。ですが、実際にこういふとき、東西、様々なネットワークがあって、誰とどういふかを決めていなかったと、ハタとしました。

馬場：愛川舜寿会としては、いきなり動いても迷惑かなと迷いました。元旦で現場は混乱しているだろうと、ガチャガチャ感が見えました。でも、しばらくたっても全然、全国組織からの連絡が来なかったから、「これは飯田から連絡が来るぞ」と思っていて(笑)、職員たちと覚悟はしていましたね。

飯田：馬場さんのところは、災害派遣の経験があるから想定できるよね。未経験の法人は確かにどういふかと足踏みしてしまう。

大林：まさに私たちの法人がそうで、何ができのかがわからないでいました。でも、飯田さんからメッセージが来て、「よしやろう」となりました。

馬場：そう、飯田からはすぐ、「いくぞ!」って連絡がきました。「わかった!」とすぐ反応しました。僕は、リーダーシップとフォローシップという概念があると思っていて、リーダーシップを持つ人と、各法人のトップが持つフォローシップが大事で、「行く」と決めたら、その決断に対して、各法人のトップがどれだけ早く判断して、レスポンスできるかが大事です。トップが意思決定の段階で迷っていたら、正直、そういう組織とは一緒にいけないかなと思います(笑)。こうして、レスポンスが早かった6法人と、FamSKO(ふぁむすこ)という団体ができました。

飯田：ところで、支援が早すぎて迷惑ってことはないと思いますよ。今回の震災では、「秩序ある支援」といふような発災すぐの支援活動の是非について議論がありました。実際、僕たち福祉楽団は、2019年の台風19号のときに被災しましたが、うちの職員だけではまわらないのが目に見えていました。そこで、メッセージで馬場さんに助けを求めたら、すぐに自分の

飯田大輔 | いいだ・だいすけ

社会福祉法人福祉楽団 理事長／株式会社恋する豚研究所 代表取締役
1978年千葉県生まれ。東京農業大学農学部卒業。日本社会事業学校研究科修了。千葉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程修了(学術)。2001年、社会福祉法人福祉楽団を設立。特別養護老人ホーム等の相談員や施設長などを経て、現在理事長。2012年、障害のある人の仕事をつくるため株式会社恋する豚研究所を設立し現在に至る。



ところだけではなく、東京、北海道、神奈川などの団体から職員を派遣してくれました。ただ、嬉しい。迷惑とか混乱なんて全く感じませんでした。

松井：私たちもあのときは被災して、暑いさなかに停電してクーラーも効かないし、人手は足りないし。本当に、職員を派遣してくださって本当に助かったし、心強かったです。

6法人(FamSKO)のつながりは特別なものではない

——ところで、どうしてこの6法人がいくことになったのでしょうか？

飯田：小田原福祉会さんとは20年以上前から、ナイチンゲールのケア理論の勉強会で一緒しています。また、生活クラブさんとも20年以上前から小規模ユニットケアや様々な研修や活動で一緒しています。「生活を整える」といふことに基盤をおき、そうした考え方や理論を学びたいという法人が増え、日常的なやりとりのほか、勉強会や視察で一緒になることが多かった法人です。職員の交流もありますし。気合いというよりはもうちょっと理念みたいのところであつていふような気がします。そのような信頼関係から、いざ災害派遣をするようになったときに、この6団体であれば一

緒にやれると思って、お誘いをしました。

時田：今、社会福祉法人って継続的に事業をするために、ビジネスの視点から連携とか大規模化という方向にきています。しかし、福祉楽団さんとはそういうことで始まった関係ではありません。大規模化が社会福祉法人にとって本当にあるべき姿かわかりません。いい仕事ができる担保にはならないと思っています。お互い、日頃の活動に共感するところがあって、つながっている関係です。本質的なところでつながっているチームです。

馬場：特別なスキルやノウハウではなく、平時からつながりがあって、ケアへの思いを同じくしていたからできたのです。日常の中で築いてきた関係性が、いざというときにどれだけ重要かが今回の経験で分かりました。特にこの6法人が特殊なことをしていたわけではないんです。

飯田：しかし、未経験の法人同士だと、なかなか支援に踏み出せないってところもあります。その点、FamSKOの中には、災害支援の経験値がある法人が複数いますので、「じゃあ、福祉楽団の声かけに乗られる！」みたいな安心感もあるのかなって思ったりはします。そうやって経験が広がっていけばいいですね。どのみち、災害というのは、いつかは起きてしまうものですから。

馬場：あとは、トップのスムーズな判断でしょうね。「行くよ！人を出せるよ」というトップの迅速な判断が

大事で、それができた6法人が行ったというわけです。

——6法人(FamSKO)が行くことになった。次にトップが考えるのは、誰を派遣するか。

支援活動が職員の成長の場となる

時田：連絡をもらって、すぐに「行く人？」って職員に聞きました。手を挙げたのは、災害派遣の経験がある職員か、これまで機会がなくて行けなくて悔しい思いをした人でした。行った経験がある職員は、台風19号の際の派遣の経験をいまだに語ります。被災地支援経験は望んでできる経験ではありません。彼らの良い学びになっています。

大林：非日常の経験ですし、職員の経験値がぐっと上がるめったにない機会です。そういう面では誰を派遣させるかが大事ですね。でも、すぐ、誰を行かせるかって頭にすぐに思い浮かびます。

榎田：FamSKOでは、人がほしいとき、「介護福祉士を2人出せますか？」という感じでメッセージがきました。でも、他の大きな組織からは「性別、職歴、資格」などの縛りがあって、その条件に合った人を派遣しなくてはならず、やりにくいなと思っていました。もちろん、派遣する職員の管理はある程度必要でしょうが、私たちが行く目的は、「避難者の生活を整えること」が第一です。「性別、職歴、資格」で人材を選ぶのではなく、想定外の現場でどう創造的に動けるコンピテンシーを持った職員なのか、そっちが大事だと思います。

飯田：行かせる人を決めたら、次に考えるのは、誰と誰の組み合わせがいいか。職員の育成のためにも、3年目の若手とベテランの組み合わせとかね。この法人とこの法人の職員は大丈夫そうとか。(笑)

榎田：メッセージでグループを作ったのがよかったです。どんな人が行くのか、プロフィールも顔もわかったので、初対面の「はじめまして」でも安心できました。

松井：私たち組織は、支援のスタートは切れないけれど、飯田さんから声をかけられて、人は出せると思っていました。1,800人がいる組織ですから。しかし、現場から求められている介護福祉士の資格がある人材と、行きたいと手を挙げる人材が異なるということがあって、頭を悩ませました。介護福祉士ではないヘルパーの資格のみの職員を出したりとか、看護師の職員を出したりとか、圧倒的に年齢層が高い職員が出たり



大林喬充 | おおばやし たかみつ

社会福祉法人薫英会 常務理事／障害者支援施設薫英荘 施設長
1987年群馬県生まれ。大学卒業後、ウェディング・セレモニー業界にてプランナー、営業マネージャーなどを経験。父の急逝をきっかけに福祉を志し現法人へ入職。障害者支援施設の生活支援員、特養の介護職員等を経て現在に至る。地域を考える「よしおかイドバタベース」運営。

榎田 啓 | くしだ・たすく

社会福祉法人みねやま福祉会 常務理事

1982年京都府京丹後市生まれ。学生時代はサッカーに明け暮れたが、恩師の一言から「福祉」の道を志すことに。大阪や福岡での生活を経て10年ぶりに帰郷し、故郷の衰退に直面。世代や疾患、障がいの有無に関わらず、地域の中で人と人の支え合いを大切にする「ごちゃまぜ」の社会づくりを通じて、人々のこころ豊かで安心・安全な暮らしへ貢献する活動をする。



とか、ちょっと違うところはあったかなと思いますけど、やっぱり正直言って、求められている職員と手を挙げる職員が一致しない場合がありますね。

馬場：何か災害が起きたときにまず最初に、この人が行くんだろうなという目星みたいなものはないんですか。

松井：目星はありますね。ちょっと今機能しないんですけど災害があったときのために、登録するような制度は作ってはあります。しかし、結局それもしばらく何もないと機能しないんですよね。「もうその人退職してます」とかがあって。

馬場：なるほど、組織が大きいかからといって、簡単に人を出せるというわけではないんですよね。大きければ大きいほど、体制を維持するのも体力がいるなかで、よく派遣してくれたと思います。一方、派遣しない組織はその理由に「行かせる側にも責任がある」とリスクをいう。

時田：「何かあったらどうするのか？」という人もいますね。ただでさえ、平時から人が足りないから出せないと言います。しかし、派遣によって人が減ってもいつもと同じことができるというのが、残された職員にとっても大事な経験になります。みんなで協力したら、なんとかあったという思いを共にしたとき、職員が個々に成長し、組織全体が成長します。自分の組織のことだけ考えていたら成長がありません。それに、助け合う、

支え合うというのが福祉本来の考え方ははずです。

榎田：支援活動に参加することで、職員同士の信頼が深まりました。共同して支援活動を行うことで、職員同士の連携が強化され、信頼関係が深まります。

松井：私たちの各事業所には、「防災委員会」があるんですけど、この間その集まりがあって、FamSKOに参加した人が事業所の防災委員長だったりするんですよ。そのときの経験を、そこで話してたりしたので、行った経験が広がっていると思いましたね。

馬場：被災地支援の経験って、やっぱり言葉で伝えられない部分があるんだと思います。リアルな被災地派遣って、「マイスター的」なもので、行かないとわからない。でも、行った人の背中を見て何か影響みたいなのはあったんでしょうね。戦地からぼろぼろになって帰ってきて終わっちゃうのではなく、組織が組織として経験を吸収する形があるといいですね。

飯田：そういう点では、支援活動の経験をただの個人の経験にとどめず、組織全体で共有する工夫をしましたね。例えば、Slackのオープンチャンネルで、被災地へ派遣をした職員にエールを贈るチャンネルを作ったんです。介護職員は発信が苦手な傾向があるのですが、このチャンネルはみんなが書き込むんです。残った人が「被災地支援を引き受けてくれてありがとうございます」とか「慣れない環境で無理はしないで」など次々に書き込んでいました。本当に何かみんなが自分の言葉で書き込んで、それが200以上のメッセージになって。僕は一人ひとりが言葉を持ってるんだなってちょっと感動したんですよ。ただし、冷静さも必要でした。支援の目的を明確にしていかないと。

時田：非日常の体験で終わってはいけないわね。何かあったときに瞬時に体が動く心が動くそういう職員たちであってほしいと思います。行った人だけを英雄にしてはいけないという点には注意しましたね。支援に行かずに残った人にも現場で役割があります。日常でも心と身体が動くという職員を育成するのが、リーダーの役割です。特に私たちのような中規模の組織では、個々のメンバーが持つ経験が組織全体の強みとなります。災害支援を通じて得たさまざまな教訓を、日常業務に活かすことが重要です。

——避難所で行った支援は「地域における生活支援」だった

災害派遣福祉チーム「DWAT」の重要性

馬場：介護福祉士の報告（日報）にあった一文で、とても印象的だった出来事があります。それは、「まず、窓を開けた」というものです。真冬、多くの人が集まる避難所において、換気しないとまずいなと気がつきました。当たり前のことですが、生活を整えるとはそういうことで、さらにそれが誰の指示でもなく、これまでの経験から自分で考えて動けた。こういう人材が現場では大事です。

飯田：混乱している現場で、自発的にリーダーシップを職員がとった例がありましたね。うちが台風19号で被災したときの施設長が、今回も支援に入りました。彼は新潟地震、東日本大震災、熊本、北海道胆振などの災害支援に福祉楽団として行った経験を持っています。その彼が最初に行き取り掛かったのは、シフト表を作ったことでした。先に現場に入っていた他のリーダーから、次々と「これをやってください、あなたはこれ」と指示が出るんですが、それをやっていたらみんなが寝ないで対応するという混乱状態で、それが当たり前になっていと言います。このままでは自分たちの身がもたないと。自分たちは自分たちのあるべき形で支援に入りますって、宣言したわけです。他にも物の棚卸し表をつくったと報告を受けました。また、今回は福祉施設への派遣ではなく福祉避難所への派遣だったので、高齢者も障害者もいろいろな人がいました。家族や地域住民にはケアの基本的なノウハウが十分ではないですし、限界があります。介護福祉士の役割の重要性を感じました。

馬場：非常時でも当たり前のことをやる、という大事さがありますね。本当に、FamSKOメンバーが現場に到着したときは、指示がめっちゃくちゃという印象があります。現場にいた他のチームの看護師から「その人のトイレ介助して」と頼まれたらしいのですが、「この方は歩けるので、必要ないですよ」って、こちらから言ったとかもありましたね。

時田：そうですね、全体を適切にアセスメントして、自発的にリーダーシップを発揮するような人は大事で



時田佳代子 | ときた・かよこ

社会福祉法人小田原福祉会 理事長／認知症ケア事業協同組合 理事長
1948年神奈川県小田原生まれ。早稲田大学中退後、レストラン経営などを経て2002年に社会福祉法人小田原福祉会へ入職。日本福祉大学や日本社会事業大学大学院で学び、現在に至る。趣味は料理、議論、リサイクルショップ巡り、人と人をつなぐこと。

すね。

馬場：一般的に、災害時は医療職からなる「DMAT」が緊急的に即時現地に入るようになっていますが、今回は、福祉のエキスパートである災害派遣福祉チーム「DWAT」^{※1}の仕組みが十分機能しているとは言えませんでした。DWATは災害時に福祉チームを派遣するというシステムで、これを全国的に整備していこうという流れがあります。

飯田：今回 DMAT が、ずっと撤収できずに長期間の派遣になっちゃったのは、DWAT が機能していなかったからです。要は地域の高齢者とか、要支援者を見る人がいなかった。介護保険や障害者総合支援法でケアの社会化が広がっている中では、地域における生活支援体制をできる限り早く再起動しないといけない。これをやらないと、フレイルが進んでしまし、生命力が小さくなっている高齢者や障害者は死んでしまうかも知れない。こういうことは、まだ国の方でもしっかり議論されていないんじゃないですかね。

馬場：そもそも「被災地支援」にはがれきの撤去や炊き出しなど様々な活動がありますが、その中で介護福祉士の「支援者支援」という重要な役割を再認識する必要があります。急性期では、人手不足で福祉避難

※1 DWAT：Disaster Welfare Assistance Team の略。災害時における、長期避難者の生活機能の低下や要介護度の重度化など二次被害防止のため、一般避難所で災害時要配慮者（高齢者や障害者、子ども等）に対する福祉支援を行う民間の福祉専門職^{※2}で構成するチームです。

※2 福祉専門職：介護福祉士、介護支援専門員、社会福祉士、看護師、理学療法士、精神保健福祉士、保育士、その他介護職員等

※3 ケアの外部化：従来家庭内で行われていた介護などのケアを、外部のサービスや専門家に頼る（委託する）こと。

所のシフトが崩壊すると、特にケアの外部化^{※3}が進んでいる地域ではケアが立ち行かなくなるので、私たちはそのエンジンを止めないために初動の支援に入ります。このことによって避難者の医療への依存度も軽減され、国もDMATのみならずDWATの役割や重要性をより一層明確に認識できると思います。

飯田：そう。だから、個別施設が事業継続計画（BCP）をどれだけ頑張って作っていたとしても、いざというときには、ある程度組織化されたDWATみたいなものが機能しない限りは、ケアの外部化がこれだけ広がっているなかでは無理だよ。被災地のなかではみんな被災しているから、無理。ある程度、広域的な仕組みを全国的な形でDWATを機能させないと。

大林：今回、DWATが機能しなかったのは、組織が大規模化しすぎて意思決定がとれなかったということですか？

飯田：「どうせ介護なんか」という意識がまだ社会や政策側にあるのと、財源や平時からのチーム編成ができていないことが問題です。医療チームであれば、医師が主導権を持って意思決定し行政から任されているが、こちらにはそういうものはないし、そもそも信頼されていないように感じます。DMATは避難所を巡回してきてはくれますが、24時間サポートはしてくれないですよ。

榎田：今はDMATばかりが手厚くなっていますが、そのあとのことを考えたら、大事なのは生活支援ですよ。生活を整えていくことの重要性に気がついてほしいですね。

飯田：その地域で、在宅で訪問介護や定期巡回サービスを受けていた高齢者や障害者が避難所に来るわけじゃないですか。普通の避難所には入れられない。結局、何らかの福祉避難所みたいなものを立ち上げるしかないわけですよ。そこをちゃんと受け止めていかないと、命を失ってしまう。国の支援制度は、残された特養や老健など福祉施設の支援制度しか考えていない。施設に職員が出動できなくなってしまっという想定でしかない。「訪問介護ステーション」や「定期巡回」のようなものを被災地で立ち上げるDWATというのも発想としてはいいですね。そのためにも、FamSKOでDWATを常設したいですね。

榎田：疑問なのですが、逆になぜDMATは機能しているのですか？

飯田：それは、職場が同じで顔がみえる関係という

のが大きいですね。たとえば、千葉大学や東京医科歯科大学の附属病院には常設のDMATがあります。でも、福祉施設では、自分の組織だけでは人材も足りないし予算もない。きちんと機能させるにはある程度顔の見える規模の連携した組織がいいでしょう。年に何回か一緒に研修、訓練をして、その後に飲み会でもしておくというのが大事な気がします。

大林：常設のDWATですか、そういう仕組みがあると職員を派遣しやすいですね。しかも、日常からケアの質を高め合う自主的はチームをつくっておけば、ケアを中心に据えてつながっていられます。

榎田：この6法人のいた現場では、みんな「生活をしてた」という報告があってそれが印象です。管理された現場ではなくて、ちゃんと生活がなりたっていたというのが特に印象的です。

時田：その言葉には、そういう究極の場面でも、ちゃんとケアの本質は自立支援だという意識を持って仕事をしてた人たちがいたたんだらうなって思っ嬉しいですね。

榎田：今回の経験で、介護福祉士が被災現場でできることがたくさんあることがわかりました。「自立支援を通して、生活を整える」という本来のケアの目的のために、介護福祉士がこんなに被災地で活躍できると改めて認識できたのは、私にとって大きなことでした。この認識が広がっていけば、今後、多数の介護福祉



馬場拓也 | ばば・たくや

社会福祉法人愛川舜寿会 理事長

1976年神奈川県生まれ。大学卒業後、外資系アパレル企業を経て2010年に2代目経営者として現法人に参画。19年「カミヤト凸凹保育園」を開園。22年 スーパーマーケット「春日台センター」跡地に地域共生文化拠点「春日台センターセンター」と洗濯代行事業「洗濯文化研究所」を開業。日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科修了。

士を擁する社会福祉法人は、こいつら災害で活躍できるぞと確信し、自信を持って「行ってこい！」って送りだせるようになります。こういう機会を通じて、介護福祉士の専門性を社会に発信していきたい。

時田：時たま思うのですが、介護職が全国一斉にストライキしたらどうなるか。

一同：大笑い

時田：ストライキしたら、生活が、社会が成り立たないですよ。そのくらい介護というのは大事で、介護があって暮らしがあるのです。

馬場：そうですね。福祉そのものの再定義の必要があります。福祉は、日常の質を問うものです。今の行政は、被災地支援を浅く見ている。暮らしに立脚していることを示していかないと。

大林：今回の被災地支援の報告会をしたところ、二の足を踏んでいた組織と、災害支援協定を結ぶことになりました。こうやって経験を語っていくことで、新たなつながりができて、広がりができていくことが嬉しい。

松井：どこか、リアリティがない、災害が起こるとは思っていない、そんな若い職員に、災害は必ず起こると浸透させるのは本当に難しいですが、この経験を少しでも多くの人に届けて、「自分の地域で起こったらどうするか」というリアルな学びにつなげてもらえたらいいです。

飯田：今回、地方自治体の衰弱というのを感じました。輪島市役所と何回かやり取りして思ったのは、ま

ずきちんとやりとりできる行政マンがない。混乱も相当あったと思いますが主体性が感じられないという印象があります。輪島市役所の人だと思っていたら、その人は全然違う自治体の人でヘルプだったということを知り、撤収日に知るという珍事件もありました。こうしたことは、輪島市に特有のことではなくて、全国の自治体に蔓延している課題だと思います。立ち上げた福祉避難所にトイレがなくて、仮設トイレの設置を要求しても全く動いてもらえない。福祉避難所にトイレがないって信じられますか。3週間なかった。厚生労働省と直談判しようやく設置されました。直談判していなかったら、最後まで設置されていないと思いますよ。

時田：そういう弱小自治体が被災したら本当に大変。生き残れない。広域連携って必要です。

大林：私のところでは、災害派遣が終わって、事後報告の法人研修をやったんですね。町の担当者とか議員も来てくれて、輪島でどんなことをやってきたか、介護福祉士がどんな活躍をしたってという報告をしました。実は、何年か前から災害支援協定を町で結びましょよと投げかけていたんですけど、あまり町も関心を示さなくてそのままズルズルしていたのですが、今回の報告会参加した後に、結びましょよとなりました。介護福祉士の活躍が伝えられて、彼らが必要だということがわかってもらえてすごい嬉しかったです。

飯田：僕は、自分でもなんで災害の支援するのかなんて考えるのは、自分たちが支援してもらったからです。いつ、助ける側が助けられる側になるかわかりません。災害とはそういうものです。そして、助けてもらった経験がある人たちは、それをいつか誰かに返すでしょう。平時から、こうやって広い意味での信頼関係をつくっていきたいですね。ですから、できる範囲で、自分が持っている資源を使ってそのときのために行動し続けたいですね。

時田：介護事業所が有事の際に事業を継続できるよう定めておくBCPが、2021年の介護報酬改定で義務付けられました。いざという時に使える、質の高いリアルなBCPにするためにも、自分たちの組織だけでBCP対策を策定するのではなく、互いに補完しあう複数の団体で共助しあった、今回の事例を役立ててほしいですね。



松井千佳 | まつい・ちか

社会福祉法人生活クラブ 常務理事

1968年愛知県生まれ。友人に紹介され2000年に特別養護老人ホーム風の村（現生活クラブ風の村特養ホーム八街）に入職。当時は栄養士として勤務していたが、現在は総務部長として事業本部に勤務。災害支援の際はバックオフィスを担当することが多い。

リアリティのあるBCPをつくろう

座談会を受けて



時田佳代子（社会福祉法人小田原福祉会 理事長）

1

支援を通じて気づいた机上の「BCP」

6法人による能登半島地震への支援活動を通じて多くの学びがありました。被災地は不測の事態が毎時発生するような現場であり、乗り越えなければならない課題が山積する場です。この冊子の作成にあたって6法人の責任者とともに座談会に参加し私が感じたのは、事業継続計画（BCP）に実際の経験を反映させることの重要性です。

BCPは災害や緊急時に事業を中断せず、継続できるようにするための計画です。2021年の介護報酬改定をうけて、BCPの策定は2024年からすべての介護事業者に義務付けられました。同じ法人内でも事業所ごとに計画を立てるため、本来であれば施設の置かれた地理的・環境的な条件に合わせて計画が作られるべきものです。しかし、被災経験のない法人や事業所は、あまりにも情報が少なく、画一的なもので机上の空論にならざるを得ません。

これまでの経験の蓄積が少ないからこそ、災害を経験した事業所の知見が役に立ちます。今回の介護福祉士派遣での具体的な体験が、BCPにリアリティを持たせられるきっかけになったと感じています。

2

BCPとは何か—私たち小田原福祉会の視点

現実味のあるBCPを作ろうと本気で考えたとき、私たち小田原福祉会のように複数の小規模な事業所が分散している法人では、特に不測の事態における指示命令系統の確立が大きな課題だと感じました。例えば、現場の判断に頼る場面が増えるため、エリアごとに自主的な判断を任せるか、それとも中央からの指示を仰ぐべきかという基本

方針を考える必要があります。また、私たちのように訪問介護や訪問看護のような在宅を支えるサービスが、災害時に個々の利用者にとってどう対応すべきなのか。連絡手段やライフラインが途絶えた時の安否確認の方法から始まり、どう避難させれば適切な支援を受けさせることができるのか、事前に訪問リストを整備するのかなど現実的な問題が浮かび上がります。

6法人の中でも、福祉楽団については2019年の台風では被災者となり、今回の能登地震で支援する側を体験しています。この両側を知る同法人の視点は貴重です。リアル体験に基づく災害対応は、私たちだけでなくこの冊子を手取る方々が今後BCPを策定するときに現実味を持たせるための大きな参考になると確信します。

3

この冊子をどう活用するか

実際の災害現場で得られた教訓をどう活かすか——。例えば私たち小田原福祉会では、これを活用した地域での勉強会の企画や、自治会や消防団など地域の他の組織とも話し合いの場を持つこともできると感じました。災害時の支援だけでなく、日常的な協力体制を築き、いざという時に円滑に連携できる体制を強化することも必要です。また、福祉避難所としての機能強化や、地域全体での避難計画の検証にも、この冊子を役立てていきたいと思っています。

ここにまとめられた知見は、被災経験のない私たちが、現実的で実効性のあるBCPを策定するための重要な手がかりになります。全国の介護事業者が活用し、次の災害に備えることで、より強固な防災体制を築き、一人でも多くの生命が救われることを祈っています。

おわりに

それぞれの振り返りから

F 社会福祉法人福祉楽団

窓を開けることからはじめた輪島支援

福祉避難所に到着して感じたことは換気ができていないことです。朝の集まりで新鮮な空気を取り入れることの重要性を共有し、定期的に換気を行いました。また、コロナやインフルエンザにかかっていると思われる人が



雪が舞うなかで支援物資の運搬も重要な仕事でした

混ぜこぜで避難していました。自分が病気にならないように、他の人に感染させないために、こまめな消毒、清潔と不潔の見極めを意識して取り組みました。なんとか体調を崩すことなく活動を終えることができました。

私は、被災地支援が初めてでした。第1次派遣隊(1/11~17)ということもあり状況がわからない中でしたが「介護福祉士」として限られた時間でやることをしようと思いました。モノの整理から口腔ケア、整容、身体や環境の清潔など、主体的に取り組めたと思います。

ただ、1週間を振り返ると、スキルや経験が足りないなど思うところもありました。全体を見る目や、何を優先して行なうべきか等を考える力が未熟だなど思ったので、そういった能力を養っていただけたらと思います。

古山弘人 こやま・ひろと 特別養護老人ホーム 杜の家なりた 施設福祉サービス部部长 社会福祉士／介護福祉士 1997年生まれ



2019年の台風支援の恩返し

2019年の台風で被災地の経験をしたさい、他法人の人たちが応援に駆けつけてくれたことが心に残っていて、自分も何かできないかと今回の支援を決意しました。私が参加した第6次派遣隊(2/5~11)はある意味で「安定期」に入っていて、支援のフェーズが変化している時期でした。もっとも意識したのは、支援する側と、される側の関係にならないこと。避難者の持てる力を活用し、自立できるようにサポートしていく意識は不足していました。また、日々、入れ替わる支援者間のコミュニケーションは、ホワイトボードを活用したり、いつもより声をかけあう、ICTの活用など、情報交換が大切だと感じた。自分自身の健康管理はつねに注意し、食事、睡眠、息抜き、できる手段での清潔保持を行いました。

自分が病気になってしまっただけでは支援どころではありません。そのためには、多少のズボラさ(どこでも寝られる、トイレできるなど)も必要かと思います。「なんでもやる!」という気持ちと、優先順位をつけて行動することを、日頃から意識し、鍛えておくことが大事だなと感じました。

林有子 はやし・ゆうこ 特別養護老人ホーム 杜の家くりもと 生活支援課長 看護師 1975年生まれ



申し送りは事務所で顔と顔を合わせて

a 社会福祉法人愛川舜寿会

本人と一緒にとことん考える

今回、第1次派遣隊(1/11~17)と第8次派遣隊(2/15~20)の介護福祉士として支援に入りました。到着するや否や、まずは避難所の環境整備から始めました。私たちが到着した時、避難所では人手が足りない中、支援物資が次々と届いていました。そのため、支援物資や日常生活用品が雑然と置かれ、廊下や部屋が狭くなっていました。また、感染症の可能性がある方とそうでない方が同じ大広間に集まっているにもかかわらず、換気が十分にされていませんでした。

私たちが到着することで、そのような環境を整えることにも手を回すことができました。避難者の方々にも声をかけながら、一緒に窓を開けて換気を行い、ベッド周りの清掃や物資の仕分けを進めることができました。

第8次派遣隊として入ると、避難者の方々の笑顔が増えたように感じました。急性期の状況から復興への段階へ移行し、私たちの支援も終了となりました。支援者が

高瀬雄志 たかせ・ゆうじ 小規模多機能型居宅介護KCCショータキ 介護福祉士 1983年生まれ



減ることに不安を感じる方もいらっしゃいましたが、「自分たちでできることはやるからよ」と、自分たちの手で状況を改善しようとする方もいました。

介護福祉士として大切なのは、その人が自分らしく生きるためにどう支援するかを、本人と一緒にとことん考えることだと思っています。避難所という限られた状況では納得いくケアは難しさもありましたが、それでも避難者の方々と対話し、その人の「人となり」を感じ、ささやかですが笑顔を見せ合うことができたと思っています。



持参した寝袋で寝る

使命感と冷静さが大事

私はこれまで、2016年の熊本地震、2019年の千葉台風15号、そして今回の石川能登半島地震の3つの大規模災害において、介護福祉士として支援活動に携わってきました。今回担当したのは、第3次派遣隊(1/21~27)と第8次派遣隊(2/15~20)です。

災害支援の現場で最も重要なのは、ペース配分と健康管理です。支援活動は非常に過酷で、支援者が緊張状態のまま全力で取り組むと、体力的・精神的に持た

田畑二郎 たばた・じろう 特別養護老人ホームミノワホーム生活相談員 介護福祉士 1971年生まれ



ないことがあります。経験から学んだのは、最初から全力を出すのではなく、「普通に生活している人がいるのだ」と冷静に捉え、初めは70%の力でスタートし、徐々に100%、120%の力を発揮していくことで、持続可能な支援ができるということです。

また、福祉避難所では避難者の方々の身体的・精神的な状況に関する情報が非常に重要です。先行するチームからの情報に基づいて支援を行います。実際に対応する中で新たな発見がありました。例えば、2人の介助が必要とされていた避難者の方が、実は片足の膝を支えることで1人で立つことができたり、見守りなしでトイレでの座位を安定させることができたりしました。

このような支援活動を通じて、避難者の方々の笑顔や安心した表情を見るたびに、介護福祉士としての使命感と感謝の気持ちが深まります。困難な状況下で、微力でも力になれたことに誇りを感じています。



焼き出しボランティアによる食事

ふるさとの復興を願う歌声

被災地派遣に行くことになり、自分より周りの人たちのほうが不安になっていました。不思議と私自身に不安はなく、介護士としてできることももちろんですが、他に何かできるか考えていました。自分にできることを考え、一緒に行く上司にも相談し、余暇の時間の楽しみになればと思いギターを持って行くことにしました。

実際現地に行くと避難者の方はそれぞれに自分の時間をもち生活されていました。テレビでは毎日被災地の様子が流れていましたが、チャンネルを変えることなく他の地域や故郷の様子を確認されていました。

同じ派遣隊のメンバーの協力もあり、夕食後の時間を使い、歌を歌おうとなり実際歌ってみるとこれが毎日の夕食後の日課になりました。自分が歌ったり、ギターを弾きそれに合わせ被災者の方が歌ったり、明日は〇〇を歌ってとリクエストくださる方もいました。最後の夜、支援者の一人の方が「早く私たちの町が復興するようお願いを込めて歌いましょう」とみんなで歌った『ふるさ

吉岡孝人 よしおか・たかひと 小規模多機能型居宅介護 はごろも苑 ないきの家 主任 介護福祉士 1981年生まれ



と』は素晴らしい時間でした。

正しい基本的な介護はもちろん大切ですが、柔軟な介護、対応が求められていたように感じました。大勢の中で生活する中で、支援する立場の自分のことを覚えてもらうコミュニケーション能力も必要に思いました。覚えてもらうことで短い期間でも信頼関係を築き、それがその時の良いケアに繋がると感じました。

介護福祉士によるギター演奏も



被災地で役立ったサバイバルスキル

震災当日、金沢市に滞在しておりましたが、凄い揺れを感じたものの、大きな被害を受けることはありませんでした、しかし、輪島市に入り、その壊滅状況を目の当たりして金沢市との差に驚愕しました。「海と空」の建物の安全は確保されていましたが、それでも余震が来ると少し怖かったです。また、様々な物資が揃って



避難所にいる人みんなで体操をする

いる環境ではあるものの、不安のない安心できる生活環境とは言えない状況でした。

現地での支援活動では、自覚している介護感の違いに戸惑いがあり、日々のケアに手を出し過ぎていることを実感しました。徹底的な観察力、情報処理能力、機器に頼らない介護技術の習得が大切であることを学びました。他の方々と一緒に活動することで自分が行っている日常のケアを改めて見直す機会となり、被災者を支援するだけでなく、自身の学びと成長にも繋がりました。

また大前提として、被災地に入って活動するためには、自分の身を守れないと始まりません。今回は、日頃から趣味で行っていたサバイバルやブッシュクラフトの体験等が大変役立ちました。どの状況下でも体を休める、その場にある物で代用する体験等しておくことが被災地支援の実践では役立つと思いました。

五宝健介 ごほう・けんすけ 総合老人福祉施設 はごろも苑 管理者 介護福祉士 1979年生まれ



S 社会福祉法人生活クラブ

支援の思いは今も続いている

能登支援の話があったとき「行きたい」とすぐに思いました。看護師として50年以上、様々な職場で多職種協働の経験があること、20数年登山を続けており体力にそれなりに自信があり、また登山関係の道具や食料はそのまま活用できると考えました。

私達が参加したところは高齢者の住居型施設でした。そこでは汚物処理（断水の為、凝固剤を入れた袋を毎回便座にセットします）、ポリタンクで室内へ水を運び入れる作業、救援物資を車で取りに行く、入浴施設へ送迎して入浴介助…などを繰り返し行ないました。

それと並行して避難者の方に寄り添い、精神面、健康面、認知状態、ADLなどを見守り、必要に応じて援助します。それを介護福祉士、看護師、PTなどが協同して支援していきます。他の小中学校などの避難所とは環境、コミュニティーのあり方が違った避難所

牛坂さよ子 うしざか・さよこ 重
心通所さくら 看護師 1954年生
まれ



だったと思います。

知り合った独居の被災者が気になり、今も月に1回は輪島に行っています。支援の継続はまだまだ必要だと行くたびに感じます。私も、自分が参加できるボランティアを模索している日々です。

あるもので栄養バランスを考える食事



平時からの備えが大切

日ごろから体調管理に気を配っていましたが、支援に入ることになり更に徹底して心身共に万全な状態にしました。それは、人の力が必要だから、人や場所を守る為に。

現地に着いて見たものは、生活するには極めて困難な場所と、そこで復興の為に頑張っている人々。医師



自衛隊が要介護者を移送する

秋山 洋 あきやま・ひろし デイ
サービスセンター流山 ヘルパー2
級 1974年生まれ



とコーディネーターを中心に連携をとり、次の新しい生活の為に活動していました。介護の専門職として技術や知識を使い、介護度や体調に関わらず、全ての被災された方のケアに入りました。

ケアをしながら学んだ事は、電気と水の確保。避難所のゴミや物資や備品の環境整備。ストレスを増やさない空間作り。しっかりした口腔ケア。レクリエーション。会議に参加し行政と連携をとる。今いる全員と連携をとらないと復興できない事。そして自身から考え行動する事など。他にも多くの学びがありました。

活動を終えて思うことは、やはり平時から私生活も仕事も体調管理をし、心身ともに万全でいること。介護技能も知識も雑学も自身の能力を十分発揮できるよう備えること。各地で起こった災害から復興までの歴史を知っておくこと。私ももっと備えていればもっと多くの活動ができたと思えます。

K 社会福祉法人薫英会

非常時こそ、いつもの暮らしを

私は輪島市の福祉避難所「海と空」での5日間の活動を経て、「避難者の方々にとって、福祉避難所での生活」は通常の生活ではなく、「元の生活に戻るまで」の期間であり、今後の元の生活にスムーズに戻るためには、コミュニケーションを多くとり、「その方それぞれの生活」について知り、そのために必要な支援を行うことが大切だと感じました。

しかしながら自身が活動した中で、自分にどれだけの事ができたのかという部分は正直分かりません。避難者の皆さんが自分たち支援者と過ごして少しでも「元の生活に戻る為」の活力が湧き、笑顔が増えたのなら、自分が活動した意味があるのだと信じています。

日頃、私たちは「介護福祉士」という専門職として技術や知識を持ってケアにあたることはもちろんですが、それは被災地でも同じです。そして「人の生活を

飯島慎吾 いいじま・しんご 特別
介護老人ホーム 船尾苑 主任 介護
福祉士 1988年生まれ



支える」ために対象者の情報を少しでも多く収集する「コミュニケーション」が不可欠です。また、サバイバル知識も普段から学ぶ必要性も感じました。

支援物資は整理して使いやすく



未来を見据え最適解を判断する

災害の前は私たちと同じ日常生活が当たり前であり、その日常が災害により崩れてしまった。その当たり前の生活を少しでも取り戻せるように、テレビを見て一緒に笑い、時には外に出て煙草を吸い、散歩をするなどその人が大切にしていた日常を意識して支援に入り



仮設の給水タンクは神奈川県が設置してくれた

大林史彬 おおばやし・ふみあき
特別介護老人ホーム 船尾苑 主任
介護福祉士 1990年生まれ



ました。次に繋がる生活を続けていくためには人と人との関わりや物資、環境などが必要でした。

介護福祉士として、つい支援をしたくなってしまう場面が多々ありました。しかしそこで簡単に介入してしまうと、その人の今後の生活の妨げになってしまう。本当に必要な場面の判断を意識しました。ただ、避難所での皆さんの生活について改めて考えていくとなると何が最適解なのかは日々の中でも変化していくものです。「これだ」という正解はなく、普段のケアと同じだとも感じました。

限られた資源、環境の中での臨機応変に対応できる力や情報収集能力や判断力、行動力を常日頃より鍛えておくべきだと思います。またコミュニケーションも円滑な話し合い、協力体制をとるには必要不可欠です。次の災害のために準備し整え、鍛えていきたいです。

0 社会福祉法人小田原福祉会

広域支援の重要性

いざ行くとした時に、何が必要か何が求められるのか、考えながらの道中だった。何事もない日常が流れている場所もある中で、輪島市に近づくにつれ被害の広がりを実感し、被災地はそこだけではないということを感じた。

また、地域の繋がりが非常に重要であることを実感したと同時に、広域での支援の在り方や、現地のニーズに合わせた支援が必要であるということを感じた。『共に過ごすことで感じるもの』ということ意識して臨んでいたため、今後の災害支援のあり方を学ぶ貴重な経験となったし、自助、トイレ、広域支援の重要性を感じたのでそれを広く知ってもらいたいと思った。

平時に備えておくべき技術や能力については、防災知識についてはもちろんのこと、応急処置や安全確保の方法等のサバイバルスキル、自衛隊のような知識やスキルがあれば、どんな環境でも支援ができるなと思ったのと、一番はコミュニケーション能力が重要で、日々のケアに

孤立させない関わり方

私は東日本大震災の時に初めてボランティア活動に参加し、その時の経験や反省を少しでも活かせればという想いで今回の能登半島地震災害支援に手を挙げさせて頂きました。

輪島での生活は決して作業でのボランティアではな



要介護者と話をしながら介護をすすめていく

西山剛史 にしやま・たかし 小規模多機能型居宅介護 潤生園みんなの家ほたるだ 管理者 介護福祉士 / 防災士 1982年生まれ



当ではまると実感し、非常時には、それを可能にする非常時の通信技術などがあると、支援の輪が広がりやすいと感じた。そこも今回、情報共有システムを構築などしていたので、多種多様な専門職チームの力を感じた。

最後に、支援する人は、支援する人を支える人がいるからできるといえる。そこを支えることができればもっと支援の輪は広がっていく。

爪切りなど基本的なケアを展開していく



杉本敦軌 すぎもと・あつき 認知症対応型共同生活介護 潤生園よりあいどころ螢田 係長 介護福祉士 1988年生まれ



く、これから起こりうる自然災害に対する学びを深めるために、一緒になって共同生活をさせてもらっているということを念頭に支援に入りました。

被災者も支援者も基本的には、単独での行動を避けることは鉄則ですが、様々な場面で「孤立しない・孤立させない」という関わり方で得た大切さを、実感できた気がします。

他の団体や組織も混在する中、情報収集や連携を意識した「常に察する能力」が必要であることを肌で感じる事ができました。また、たくさんの幅広い情報を集約し、積極的に発信することも重要で、生活支援の可能性を見出せるきっかけづくりとなることと思います。

支援に携わることができ感謝しています。ありがとうございました。

FamSKOの活動にご協力いただきありがとうございました

社会福祉法人弘和会
医療法人社団オレンジ
NPO 法人ぐるんとびー

KDDI 株式会社
株式会社アジ（衛星携帯.com）
株式会社芝山農園
株式会社恋する豚研究所

調査・研究にご協力いただきありがとうございました

森野純夏（慶應義塾大学院 健康マネジメント研究科 修士課程）
鈴木俊文（静岡県立大学短期大学部社会福祉学科（介護福祉専攻）教授）

順不同・敬称略

介護福祉士被災地派遣ガイドブック

2024年能登半島地震で私たちが学んだこと

2025年1月1日発行
1,100円（1,000円+税）

企画・制作・発行

福祉支援チーム FamSKO
社会福祉法人福祉楽団
社会福祉法人愛川舜寿会
社会福祉法人みねやま福祉会
社会福祉法人生活クラブ
社会福祉法人薫英会
社会福祉法人小田原福祉会

販売

社会福祉法人みねやま福祉会
〒627-0031 京都府京丹後市峰山町呉服10番地
tel: 0772-69-5005

デザイン

福岡南央子

編集

コッヘル

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

FamSKOの活動の一部は
日本財団の助成を受けて実施しました

